

42098

教科書文庫

4
2/0
33-1941
25000
26012

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

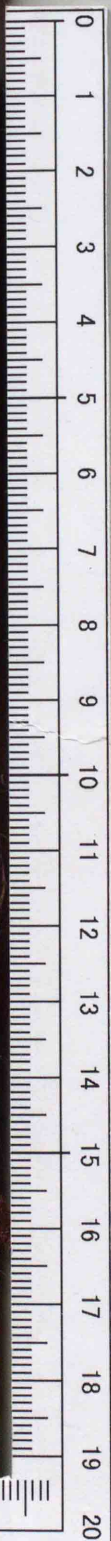
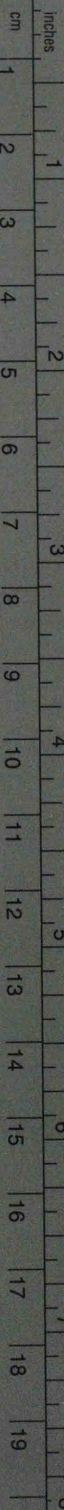


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

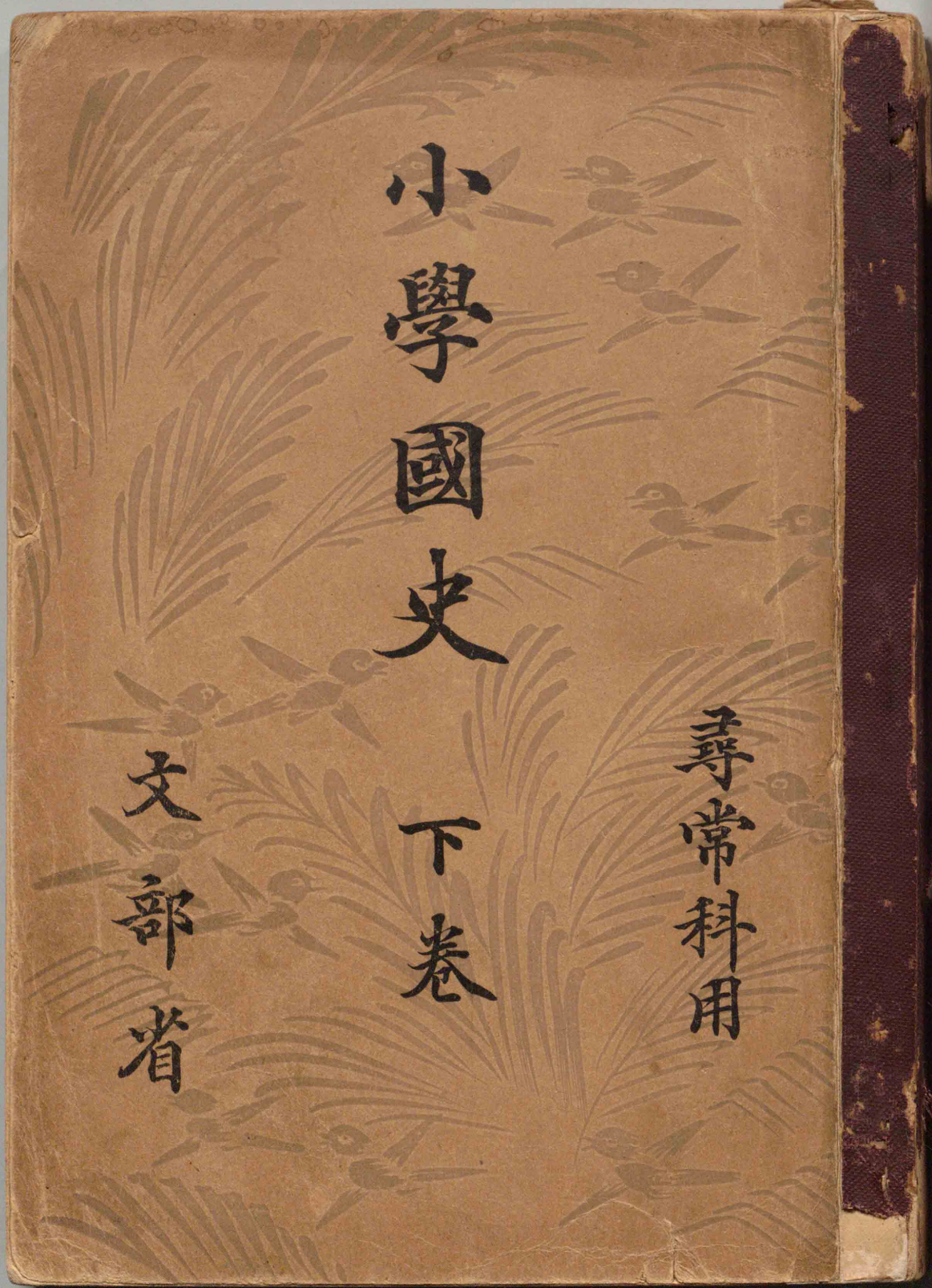


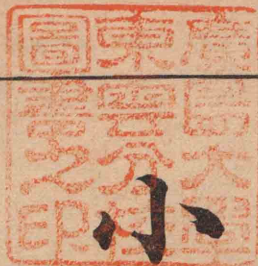
小學國史

下卷

尋常科用

文部省





小學國史 下卷

尋常科用

文部省

登錄番號	26012
分	375.9
類	M

目録

神勅

御歴代表

第三十一	織田信長	一	第三十八	大石良雄と新井白石	五十一
第三十二	豊臣秀吉	十	第三十九	徳川吉宗	五十八
第三十三	豊臣秀吉(つゞき)	十七	第四十	松平定信	六十三
第三十四	徳川家康	二十四	第四十一	本居宣長	六十九
第三十五	諸外國との交通	三十三	第四十二	高山彦九郎と蒲生君平	七十四
第三十六	後光明天皇	三十九	第四十三	攘夷と開港	七十八
第三十七	徳川光圀	四十五	第四十四	攘夷と開港(つゞき)	八十四
			第四十五	孝明天皇	九十

第四十六 大政奉還……………九十六

第四十七 明治天皇……………百四

一 明治維新……………百四

二 憲法發布……………百十五

三 明治二十七八年戦役……………百二十

四 條約改正……………百三十

五 明治三十七八年戦役……………百三十二

六 天皇の崩御……………百四十六

第四十八 大正天皇……………百五十三

第四十九 昭和の大御代……………百六十二

第五十 國民の覺悟……………百七十七

國名・府縣名對照地圖
年表

神勅

豐葦原の千五百秋の瑞穂の國は是れ吾が子孫
 の王たるべき地なり。宜しく爾皇孫就きて治
 せ。さきくませ。寶祚の隆えまさんこと當に
 天壤と窮りなかるべし。

御歴代表

第九代	第八代	第七代	第六代	第五代	第四代	第三代	第二代	第一代	御代数	天皇
開 <small>かひ</small>	孝 <small>かう</small>	孝 <small>かう</small>	孝 <small>かう</small>	孝 <small>かう</small>	懿 <small>い</small>	安 <small>あん</small>	綏 <small>すゐ</small>	神 <small>じん</small>		
化 <small>くわ</small>	元 <small>げん</small>	靈 <small>れい</small>	安 <small>あん</small>	昭 <small>せう</small>	德 <small>とく</small>	寧 <small>ねい</small>	靖 <small>せい</small>	武 <small>む</small>		
天	天	天	天	天	天	天	天	天		天皇
皇	皇	皇	皇	皇	皇	皇	皇	皇		
八第	七第	六第	五第	四第	三第	二第	一第	第十代	御代数	
代十	代十	代十	代十	代十	代十	代十	代十	代十		天皇
反 <small>はん</small>	履 <small>り</small>	仁 <small>にん</small>	應 <small>おう</small>	仲 <small>ちゆう</small>	成 <small>せい</small>	景 <small>けい</small>	垂 <small>すゐ</small>	崇 <small>すう</small>		
正 <small>せい</small>	中 <small>ちゆう</small>	德 <small>とく</small>	神 <small>じん</small>	哀 <small>あい</small>	務 <small>む</small>	行 <small>かう</small>	仁 <small>にん</small>	神 <small>じん</small>		
天	天	天	天	天	天	天	天	天		天皇
皇	皇	皇	皇	皇	皇	皇	皇	皇		
七第	六第	五第	四第	三第	二第	一第	第十代	九第	御代数	
代十	代十	代十	代十	代十	代十	代十	代二	代十		天皇
安 <small>あん</small>	繼 <small>けい</small>	武 <small>ぶ</small>	仁 <small>にん</small>	顯 <small>けん</small>	清 <small>せい</small>	雄 <small>ゆう</small>	安 <small>あん</small>	允 <small>いん</small>		
閑 <small>かん</small>	體 <small>たい</small>	烈 <small>れつ</small>	賢 <small>けん</small>	宗 <small>そう</small>	寧 <small>ねい</small>	略 <small>りやく</small>	康 <small>かう</small>	恭 <small>きよう</small>		
天	天	天	天	天	天	天	天	天		天皇
皇	皇	皇	皇	皇	皇	皇	皇	皇		

御歴代表

一

御歴代表

九第三 代十	八第三 代十	七第三 代十	六第三 代十	五第三 代十	四第三 代十	三第三 代十	二第三 代十	一第三 代十	十第三 代三	九第二 代十	八第二 代十
弘文天皇	天智天皇	齊明天皇	孝德天皇	皇極天皇	舒明天皇	推古天皇	崇峻天皇	用明天皇	敏達天皇	欽明天皇	宣化天皇
一第五 代十	十第五 代十	九第四 代十	八第四 代十	七第四 代十	六第四 代十	五第四 代十	四第四 代十	三第四 代十	二第四 代十	一第四 代十	十第四 代四
平城天皇	桓武天皇	光仁天皇	稱徳天皇	淳仁天皇	孝謙天皇	聖武天皇	元正天皇	元明天皇	文武天皇	持統天皇	天武天皇
三第六 代十	二第六 代十	一第六 代十	十第六 代六	九第五 代十	八第五 代十	七第五 代十	六第五 代十	五第五 代十	四第五 代十	三第五 代十	二第五 代十
冷泉天皇	村上天皇	朱雀天皇	醍醐天皇	宇多天皇	光孝天皇	陽成天皇	清和天皇	文徳天皇	仁明天皇	淳和天皇	嵯峨天皇

五第七 代十	四第七 代十	三第七 代十	二第七 代十	一第七 代十	十第七 代七	九第六 代十	八第六 代十	七第六 代十	六第六 代十	五第六 代十	四第六 代十
崇徳天皇	鳥羽天皇	堀河天皇	白河天皇	後三条天皇	後冷泉天皇	後朱雀天皇	後一條天皇	三条天皇	一條天皇	花山天皇	圓融天皇
七第八 代十	六第八 代十	五第八 代十	四第八 代十	三第八 代十	二第八 代十	一第八 代十	十第八 代八	九第七 代十	八第七 代十	七第七 代十	六第七 代十
四條天皇	後堀河天皇	仲恭天皇	順徳天皇	土御門天皇	後鳥羽天皇	安徳天皇	高倉天皇	六條天皇	二條天皇	後白河天皇	近衛天皇
九第九 代十	八第九 代十	七第九 代十	六第九 代十	五第九 代十	四第九 代十	三第九 代十	二第九 代十	一第九 代十	十第九 代九	九第八 代十	八第八 代十
後龜山天皇	長慶天皇	後村上天皇	後醍醐天皇	花園天皇	後二條天皇	後伏見天皇	伏見天皇	後宇多天皇	龜山天皇	後深草天皇	後嵯峨天皇

御歴代表

第百代	後小松天皇	第九代	明正天皇	第八代	後桃園天皇
第一	稱光天皇	第十代	後光明天皇	第九代	光格天皇
第二	後花園天皇	第一	後西天皇	第十代	仁孝天皇
第三	後土御門天皇	第二	靈元天皇	第十代	孝明天皇
第四	後柏原天皇	第三	東山天皇	第十代	明治天皇
第五	後奈良天皇	第四	中御門天皇	第十代	大正天皇
第六	正親町天皇	第五	櫻町天皇	第十代	今上天皇
第七	後陽成天皇	第六	桃園天皇	第十代	
第八	後水尾天皇	第七	後櫻町天皇	第十代	

第三十一 織田信長

戦國時代に諸國に起つた英雄は、誰もわれこそ京都に上つて、朝廷の命を奉じ天下をしづめようと望んで、あなが、なか、く、それをしとげるものがなかつた。ところが織田信長が出て、はじめてその目的を達し、とりわけ朝廷を尊んで、大いに忠勤をはげんだ。

信長は、平重盛の子孫だといはれてゐる。その家は代々尾張にあつたが、父の信秀は、勤皇の志のあつた武將で、神宮御造營の費用を奉つたり、御所を御修理申し上げたりした。信長は幼い時から、あらくし、いふる

信長のおひたち



織田信長の陣出

まひが多く、家をついでからも、武術ばかりはげんで、少しも政治をかへりみなかつた。家臣の平手政秀は、たいそう心配してたびく諫めたが、どうしても聞入れられないので、つひに書置して自害した。この時信長は二十歳であつたが、政秀の志に深く感激

桶狭間の戦



し、これから心を改めて行をつしむやうになつた。後に、信長は政秀寺を建てて、あつく政秀をとむらつた。

その頃、駿河の今川義元は、遠江三河の二國を従へて、勢が強く、更に織田氏をほろぼして京都へ上らうと、四萬五千の兵をひきあて尾張に攻めこんで来た。たましく、信長は清洲の城中で、家臣たちと夜話に興じてゐたが、このしらせを受け、て顔色もかへず、翌朝、味方の壘が危いと聞くと、すぐさ

正親町天皇の仰を受け

ま馬を走らせてうつて出た。義元は、つぎ／＼の勝軍にすつかり心がおごり、桶狭間に陣取つて、將士と共に酒宴を開いてゐた。信長は、わづか二千に足らぬ兵で、折からの暴風雨に乗じて、不意に義元の本陣に斬りこみ、敵兵のうろたへ騒いでゐる間に、大將義元を討取つた。この戦で信長の威名は一時にあがつた。

第六代 正親町天皇

民の心を安んじようと、お考へになつてゐたので、信長の武名をお聞きになると、おそれ多くも勅使をもつてその大御心をお傳へになつた。信長は、天皇の仰を受けて感涙にむせび、一身をさへ上げて大御心を安んじ奉

信長の勤皇



信長が皇居を御修理し上げ

ることを、堅く心に誓つた。

この頃、幕府の勢は衰へるばかりで、その命令はほとんど行はれなかつたが、たまく／＼將軍義輝が部下に殺されたので、弟義昭は助を信長に頼んで来た。信長はこれを機會に、義昭に従つて京都に入り、朝廷にお

願ひ申し上げて、義昭に將軍職をつがせた。信長は、また皇居を御修理申し上げ、御料を奉つて、ひたすら勤皇の真心をあらはした。うちつゞく戦亂のために、長い間絶えてゐた朝廷の御儀式も再び行はせられることになり、地方に下つてゐた公卿も歸つて來て、京都はしだいにもとのやうになつた。

信長は、つぎ／＼に近畿の諸國を平げ、士民を憐あはんでよい政治をしたので、その名はいよ／＼高くなつた。義昭は、これを見て快こころよく思はず、或は將軍職をも奪はれるのではないかと心配して、ひそかに信長を除かうとはかつた。信長は、これを知つて大いに怒り、義昭を追

足利氏の幕府がほろびる

出してしまつたので、足利氏の幕府はつひにほろびた。時に、紀元二千二百三十三年、正親町天皇の天正元年で、義満が將軍になつてから、およそ百八十年ほど後のことである。

やがて、信長は城を近江の安土あづちに築いた。城は琵琶湖こに臨み、七重の天守閣てんしゅかくが高く天にそびえて、人目を驚かした。信長はこゝを根據こんぐんとして、四方を平定しようとして考へ、まづ羽柴秀吉はしひでよしを中國へ遣はして、毛利輝元てるもとを攻めさせた。そのうちに、秀吉から援兵を求めて來たので、信長はみづから中國に向かはうとし、明智光秀あけちみつひでらを先發させて、自分は京都に入り、本能寺ほんのうじに宿とどつた。

四方の平定をはかる

本能寺の變

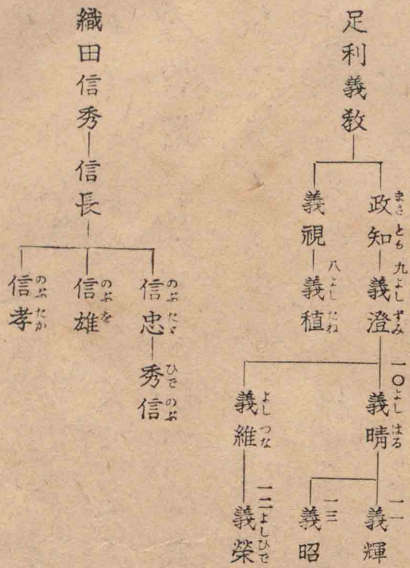
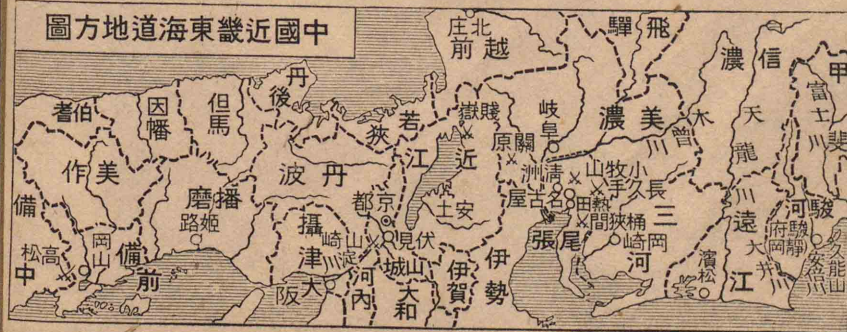
ところが光秀はかねてから信長のきびしい仕打を怨んでいたので、本能寺の警戒が手うすなのに乗じにはかにそむいて攻寄せた。信長はみづから弓をとり、森蘭丸らと共に必死に防いだ。だが、わづかの兵ではどうすることも出来ず、つひに寺に火を放つて自害した。この時、信長は四十九歳であつた。

信長の功績

信長は、さきに天皇の仰を受けて以來、早く天下をしづめて、大御心を安ん

建勳神社

じ奉ることにつとめ、まさにもその業を成しとげようとして、あたのにはかに光秀のためにたふれたのは、まことに惜しいことであつた。朝廷では、信長の功を賞して、太政大臣從一位をお贈りになつた。京都の建勳神社は、信長をまつた社である。



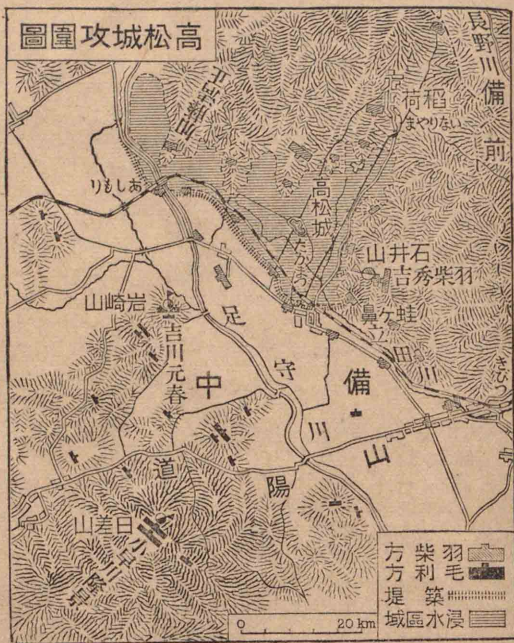
第三十二 豊臣秀吉

世 秀吉の出

豊臣秀吉は、尾張の貧しい農家に生まれた。八歳の時、父をなくして寺にやられたが、僧となるのをきらつて、武術に心がけ、常に勇士の物語を聞くのを樂しみにしてゐた。十六歳の時、遠江の松下氏のしもべとなり、後、尾張の織田信長に仕へた。はじめは草履取といふきはめて低い身分であつたが、かげひなたなく勤めたので、だんく重く用ひられ、つひに一方の大將にあげられて、たびくの戦に拔群のてがらを立てた。

中國に出陣する

信長が中國を平げようとした時、秀吉はまつさきに



命を受けて出發した。道々諸城を攻落し、進んで備中の高松城を圍んだ。城は毛利氏の部將清水宗治が守つてよく防ぎ、容易に落ちないので、秀吉は、城に近く流れてある川をせきとめて、水攻にした。折からの五月雨に、水かさが日にく増して、城の櫓も沈みさうになつた。毛利輝元は、大軍をひきゐて助けに來たが、この有様を見て、和睦を申しこみ、城中の將士を助けてもらひ

たいと請うた。しかし秀吉は聞入れないので、宗治は身をすてて、主家のため部下の命を救はうと決心し、小舟に乗つて城を出、秀吉の陣の前でいさぎよく切腹した。宗治の義烈によつてつひに和睦が成立つた。

光秀を討つ

この談判中に、たまく本能寺の變のしらせがあつた。秀吉は大いに驚きもし、また信長の死を深く歎いたが、少しも色にあらはさず、毛利氏との和睦を結ぶとたゞちに兵をかへして、光秀を山城の山崎に攻めほろぼした。本能寺の變からこの時まで、わづかに十一日であつた。

勝家をほろぼす

ある間に、秀吉は遠方から馳歸つて主の仇を討ち、しかも、てあつく信長の葬儀までとり行つたので、秀吉は世の人々から深い信頼を受け、名聲がにはかにあがつた。柴田勝家らはこれをねたんで、秀吉を討たうとした。秀吉は進んで勝家の軍を近江の賤嶽にうち破り、更に越前に攻入つて、勝家をほろぼした。この戦に、秀吉の部下加藤清正、福島正則、片桐且元ら七人の勇士が、槍を振るつてめざましく戦ひ、勇名をとゞろかした。世にこれを賤嶽の七本槍といつてゐる。

大阪城を築く

やがて、秀吉は堅固な城を大阪に築いた。その頃、この地は東と北とに大河をひかへ、西は海に臨んで便

利がよい上に、天然の要害であつた。秀吉は、こゝを根據として國內をしづめ、信長の志を成しとげようとした。朝廷では、秀吉の功を賞して、したいに官位を進められ、つひに藤原氏の外には例のない關白を仰せつけられ、ついで太政大臣に任ぜられて、豊臣の姓をたまはつた。

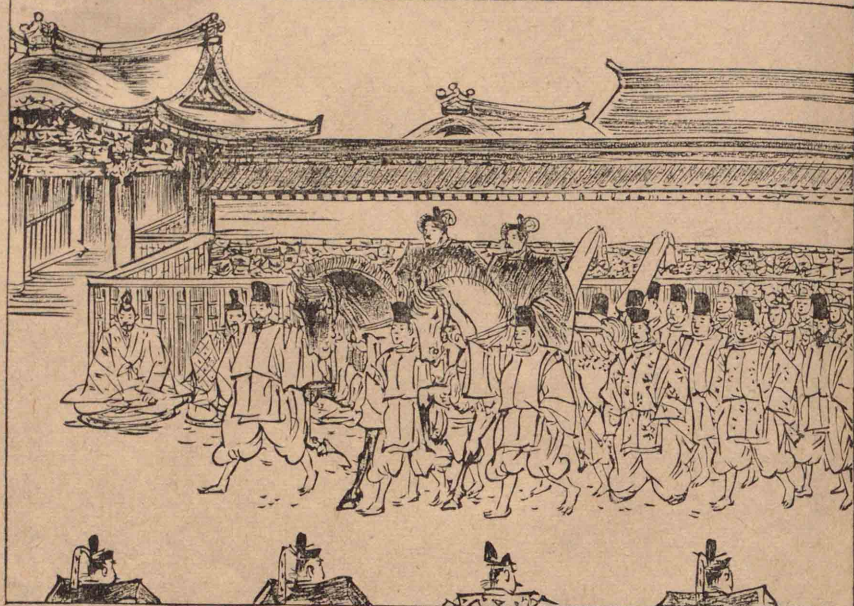
秀吉の勤皇

聚樂第の行幸



聚

秀吉は、京都に聚樂第といふ壯麗な邸宅を造つて、第七代後陽成天皇の行幸をあふぎみづから文武百官をひきゐて、行



樂第の行幸

幸の御供を申し上げた。國民はこの御盛儀を拜觀しようとして、國々から京都に集り、御道筋は民草で埋まるばかりであつた。人々は盛大な御有様を拜し、今日このやうな太平の御代にあふことが出来るのは、全く夢のやうだと言つて、喜びあつた。

天皇は、聚樂第に五日間おどまりになつたが、その間に秀吉は、いろくの催もよほしをお目にかけて、おなぐさめ申し上げ、また諸大名に、皇室を深く敬ひ奉ることを堅く誓はせた。

秀吉は、更に皇居を御増築ごぞうちく申し上げ、京都の市街をもよく整へたので、朝廷の御有様も京都の様子も、たいそうりつぱになつた。

そのうちに、秀吉は各地を平げ、關東の武將北條氏をほろぼしたのを最後として、つひに國內統一の業を成しとげた。時に、後陽成天皇の天正十八年で、應仁おうにんの亂以來亂れてゐた國內は、こゝにはじめてしづまつた。

全國平定

秀吉の政治

秀吉は、常に朝廷を敬ひ、大名をよくとりしまり、士民を憐んで、よい政治を行つた。或は全國の土地をしらべて、租税の取立て方を一定したり、或は金貨や銀貨を造らせて、商業の便をはかつたりしたので、産業はめざましく發達した。

第三十三 豊臣秀吉とよひでよしつゞき

國內がすつかりしづまると、秀吉は朝鮮を仲立なかだてとして、明と交を結ばうとした。しかし、明はわが申し入れを聽かなかつたので、秀吉は、朝鮮に案内させて明を討たうとしたが、朝鮮は、明の勢に恐れてこれを拒こほんだ。

明と交を結ばうとする

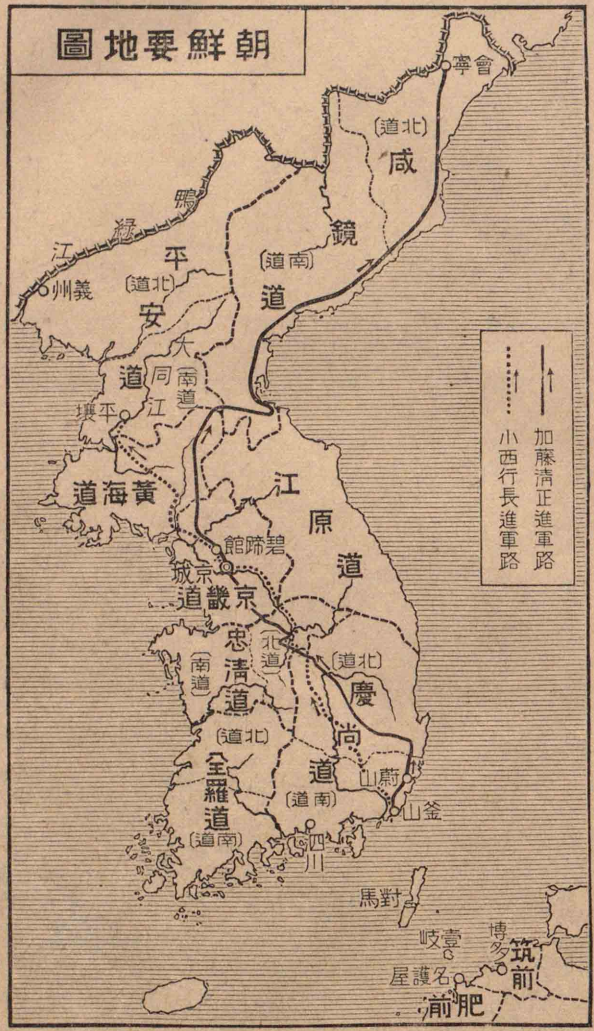
兵を朝鮮に出す

そこで秀吉は、まづ朝鮮に渡り、進んで明を討たうと考へ、肥前の名護屋におもむいて諸軍を指圖した。

後陽成天皇の文禄元年、小西行長、加藤清正らを先手として、總勢十五萬餘が海を渡つた。幾千とも知れぬ軍船に、それぐの家紋のついた幕を張りまはし、思ひくの旗を勇ましく潮風になびかせて、海をおほ

つて進んだ。

釜山に上陸したわが軍は、いたるところ連戦連勝し、わづか三箇月餘りの間に、ほとんど朝鮮全土を従へて



しまつた。この戦に、清正は、とりこにした二王子をいた



秀吉が軍船の出発を見送る

碧蹄館の戦

はり、また人民を憐んだので、人々は皆その徳になついた。

朝鮮王は、明に救を頼んだ。明は、すぐさま大軍をさし向けて、行長を平壤に破り、一氣に京城をとりもどさうとした。この時、小早川隆景は、大敵が来るとは何よりの幸、いざ日頃の手並を見せよう。思ふぞんぶん戦つて、日本に隆景ありと知らせてやるのは、實に愉快ではないか。と、立花宗茂らと進んで敵を碧蹄館に迎へ撃ち、六七倍の大軍をさんぐにうち破つて、勇名をとどろかした。

和睦が破れる

明はわが軍の勢に恐れ、行長に頼んで和睦を申し出

たので、秀吉はこれを許し、ひとまつ出征軍をひきあげさせた。ところが、明の講和の使が持つて来た國書の中に、特に爾を封じて日本國王と爲す。といふ言葉があつたので、秀吉は明主の無禮な態度を怒つて、その使を追ひかへし、再び出兵の命令を下した。

蔚山の戦

慶長二年の春、再び行長、清正らが先手となつて、朝鮮に渡り、南部の各地を従へた。やがてその年の暮、明の大軍が浅野幸長らを蔚山城に圍んだので、清正はさつそく救ひにおもむいた。城はまだ出来上つてゐない上に、兵糧も乏しく、病死するものもあつて、苦戦はひとほりてなかつたが、清正はじめ一同は、少しもひるま

泗川の戦

ず、あらゆる難儀をしのんで籠城をつづけ、やがて到着した援兵と力を合はせて、大いに明軍をうち破つた。たまく、秀吉は病にかゝつて、慶長三年八月、つひに伏見城で六十三歳でなくなつた。出征の諸將は、秀吉の遺言によつて、それぞれ兵をかへした。その時、泗川にゐた



清正が山崎に向かふ

島津義弘は、二十萬の明の大軍に逆襲されたが、わづか五六千の小勢をひきゐて奮戦し、大いにこれをうち破つたので、明軍は、二度とわが後をうかぶふことをしなかつた。

外征の結果

秀吉の志は、かやうにしてはたされなかつたが、わが國威は遠く海外に及び、國民の意氣も大いにあがつた。したがつて、遠く國外へ貿易に出かけるものがたいさう多くなつた。

秀吉の人柄

一世の英雄であつた秀吉は、一面きはめて心のやさしい人で、へいぜい母に仕へて、なにくれと孝養をつくした。かつて名護屋の陣にゐた時、母の病が重いと聞

いて、すぐ京都に歸つたが、すでに母はなくなつてゐた。秀吉は聲をあげて泣き、たしく看病かんびやうの出来なかつたことを歎いた。また、少年の頃仕へてゐた松下氏に、多くの領地を與へ、常にあつくもてなして舊恩にむくいた。

朝廷では、秀吉の功を賞して、死後、豊國大明神ほうこくたいみやうじんの神號をたまはり、正一位をお授けになつた。京都の豊國神社は、秀吉をまつた社である。

第三十四 徳川家康

秀吉の後をうけて、國內統一の業を成しとげたのは、

朝廷で秀吉の功を賞し給ふ

家康のおひたち



家康幼時の勉學

徳川家康である。家康の父廣忠は、岡崎の城主であつた。領地が今川氏と織田氏にはさまれてゐたので、獨立を保つことがむづかしく、今川氏に味方して、そのしるしに、まだやうやく六歳の家康を駿河に送つた。途中、家康は、織田信秀に奪はれ、二年の後、今川氏

のもとへ送られて、長く駿河にとめられたが、その間、いろいろの苦しみを耐へしのんで、一心に學問にはげんだ。

家康の出世

十九歳の時、家康は今川義元の先手となつて尾張へ攻入つた。桶狭間の戦に義元は戦死し、その子は愚て父の仇を討たうともしなかつたので、家康は今川氏と交を絶つて、信長と結んだ。これから家康の武運はしだいに開け、領地は増し、その勢が盛になつて來た。本能寺の變の後、信長の子信雄は、秀吉と不和になり、助を家康に請うたので、家康は兵を尾張に出し、小牧山に陣取つて秀吉の大軍と相對し、敵の別軍を長久手に破つ

て、大いに武名をあげた。それから間もなく和睦して秀吉に仕へ、後、小田原攻に大功を立てたので、北條氏の舊領をそのまま受けついで、武藏の江戸に移つた。

關原の戦

秀吉がなくなつた時、子の秀頼はやつと六歳であつた。秀吉の遺言によつて、家康は伏見城にゐて、前田利家と共に秀頼を助けたが、まもなく利家が病死したので、ひとり家康の勢が盛になつた。かつて秀吉に重用ひられた石田三成は、幼い秀頼の身の上を案じ、毛利輝元や上杉景勝らと力を合はせて、ひそかに家康を除かうとはかつた。まづ景勝が領地會津に兵を擧げた。家康は鳥居元忠を伏見にとゞめ、みづからは兵を

ひきゐて東へ下つた。そのすきに三成は、たゞちに兵を起して伏見城を圍んだ。元忠は主命しゅめいを守つてよく防いだがつひに力つきて討死した。家康は急を聞いて兵をかへし、三成らの軍と美濃せきがはらの關原に對陣してはげしく戦つた。この戦は、全國の大名が二手に分れ、豊臣・徳川兩氏の興廢を決したものであつたがつひに三成方の敗北に終つた。世にこれを天下分目わけめの戦といつてゐる。後陽成天皇の慶長五年のことであつた。

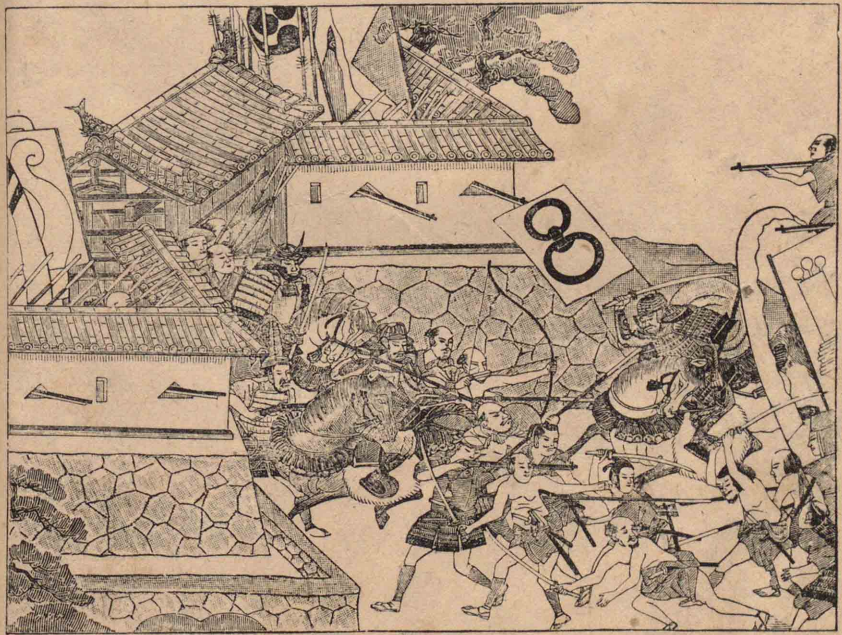
幕府を江戸に開く

關原の戦の後、家康は思ひ切つた賞罰を行つた。三成は斬られ、景勝・輝元をはじめとして三成方に味方した大名は、或は領地を取上げられ、或は遠い地方に移された。これにひきかへ、徳川方の諸將は、それ〴〵領地を加へられ、要地に封ぜられた。かうして家康は、國內の諸大名をすつかり従へてしまつた。ついで紀元二千二百六十三年、後陽成天皇の慶長八年に、家康は征夷大將軍に任ぜられ、幕府を江戸に開いた。以來、江戸は年と共に繁榮におもむいた。

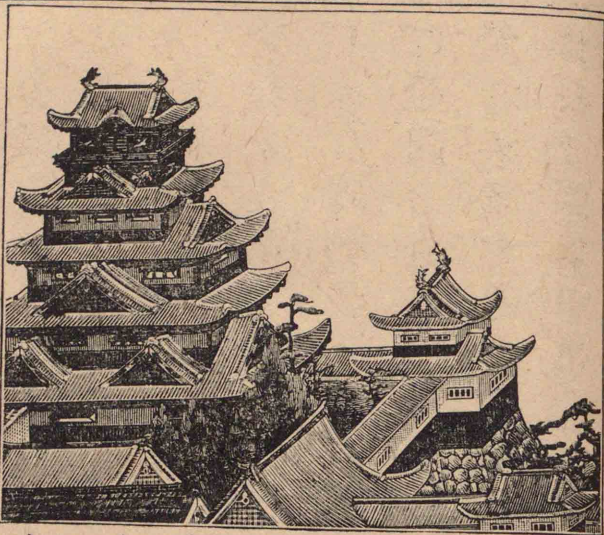
豊臣氏がほろびる

關原の戦の後、豊臣氏は一大名の姿になつたが、まだまだ勢力があつた。秀頼は、堅固な大阪城にゐて、高い官位に進み、そのうへ秀吉の恩を受けたものの中には、今一度、豊臣氏をもとの勢にかへしたいと考へてゐるものも少くなかつた。したがつて、家康は將軍職を退

いた後も、なほ安心する
ことが出来ず、豊臣氏の
力をそぐために、いろい
ろの苦心をした。さきに
秀吉が京都に建てた
方廣寺が、地震のために
こはれたので、家康は秀
頼にすゝめてこれを建
てなほさせた。その時
鑄た大鐘の銘の中に、た
またま國家安康の文句



大坂城の戦い



があつたので、家康は自分をの
ろはうとしたものであると
がめて、にはかにその落成式を
やめさせた。豊臣氏の家臣は
これを憤り、秀頼にすゝめて兵
を挙げさせた。家康秀忠父子
は、大軍をひきゐて大阪城を圍
んだが、城は容易に落ちさうに
もないので、家康は和睦を申しこみ、城の總堀を埋める
ことを約束した。總堀とは外堀のことであるが、家康
は部下のものに命じて、内堀までもすつかり埋めさせ

てしまつた。秀頼はその約束にそむいた仕打を怒つて、再び兵を擧げたが、さしにも堅固をほこつた大阪城も、今はあへなくおちいり、秀頼は城中で自害して、豊臣氏がほろびてしまつた。第百八代後水尾天皇の元和元年げんなのことであつた。

太平の基を開く

翌年、家康は太政大臣に任ぜられ、やがて七十五歳でなくなつた。家康は頼朝の政治を手本とし、秀吉のはじめた諸制度をも取入れて、幕府の制度を整へた。また學問を盛にして、長い間の太平の基を開いた。朝廷では、家康をまつた日光の社に、東照宮といふ宮號をお授けになつた。

新田義重よししげ・義季よしかぜ・松平廣忠ひろちか・徳川家康いえやす・秀忠ひでただ・家光いえみつ

第三十五 諸外國との交通

ヨーロッパ人が東洋へ航路を開く

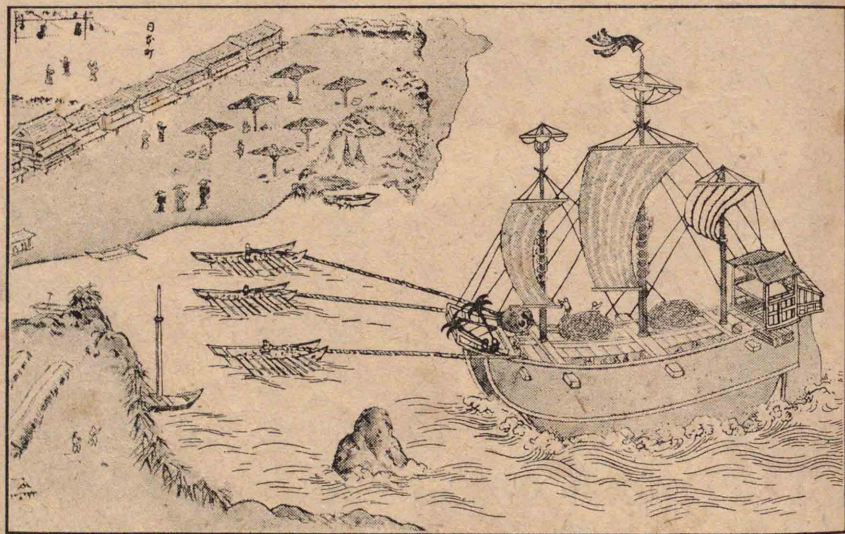
わが國が、元寇をうち攘つて、國威を海外にかゝやかした頃、元に仕へてゐたイタリヤ人で、マルコポーロといふ人があつた。その人が本國へ歸つてあらはした書物の中には、はじめに日本のことを西洋に紹介し、日本はたくさんわうごんの黄金を産出する文明の進んだ國であるとしるした。この書物が出てから、ヨーロッパ人の東洋へあこがれるものが多く、かの名高いコロンブスも東洋へ來ようとして、途中、たまくアメリカを發見し

たのであつた。その後まもなく、ポルトガル人がアフリカの南端を廻つて、はじめて印度に到達した。これからヨーロッパ人の東洋へ來航するものが、だいに多くなつた。

外國との
交通が盛
になる

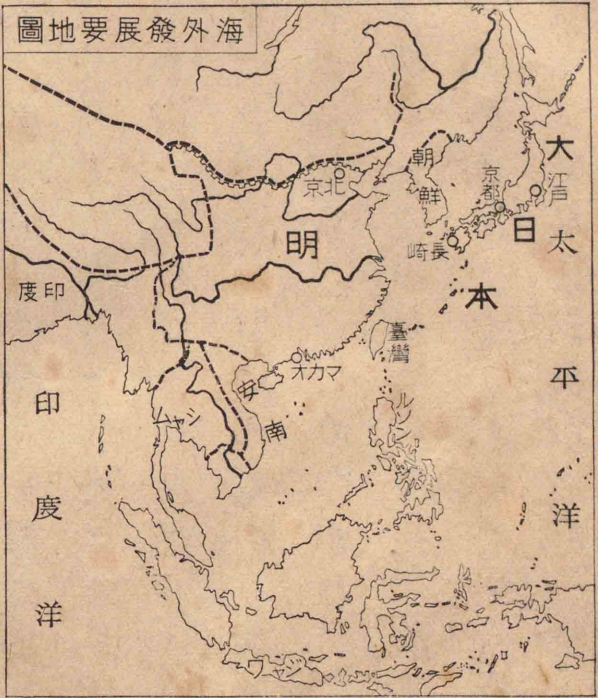
わが國へヨーロッパ人が來たのは、第五代後奈良天皇の御代、ポルトガルの商船が九州の種子島に漂着したのがはじめである。つゞいて、イスパニヤオランダイギリスなどの人々も、おひくくわが國へ來て通商をした。そのため、わが國へいろいろ珍らしいものがはいつて來たが、中でも鐵砲は、新しい武器として大いに武士に喜ばれ、まもなくわが國でも製造されるやうにな

つて、盛に戰爭に用ひられた。一方、わが國民も遠く海外へ出て盛に貿易をし、シヤム、安南等の諸國に移住するものが多く、各地に日本町さへ建てられたほどであつた。駿河の人山田長政が、シヤムに渡り、日本町の人々をひきゐて、その國の内亂をしづめ、勇名をとばるかしたのも、この



貿易船が日本町に着く

天主教が
ひろまる



をおさへるためと、西洋の文物を取入れるために、天主教の宣教師を保護し、京都や安土などには、教會堂や學校まで建てさせたほどであつた。そのため、この教は

頃のことである。ポルトガル人がわが國へ來てからまもなく、西洋の天主教が傳はつた。天主教は、キリスト教の一派である。織田信長は、當時のわがまゝな僧侶

しだいにひろまり、それにつれて、西洋の學問も行はれるやうになつた。

天主教を
禁止する

ところが、この頃の宣教師や信者の中には、神社や寺をこはしなどして、わが國の美風をそこなふものもあつた。そこで秀吉は、天主教を信仰することを禁じ、教會堂を取拂ひ、宣教師を國外へ追出してしまつた。家康も同じ方針をとつたが、外國との貿易は大いに奨勵したので、幕府の目をのがれて、ひそかに入りこんで來る宣教師が絶えなかつた。家光が將軍になるに及んで、このまゝにしておいてはならぬと考へ、信者を重く罰すると共に、國民が海外へ行くことも、いつさいさし

島原の亂

とめてしまつた。

九州は、早くから天主教の傳はつた地で、信者も多く、殊に肥前の島原半島や肥後の天草島は、その中心地であつた。この地方の信者は、幕府のきびしい壓迫あつぱくにたへかね、第九百明治天皇の寛永十四年、つひに亂を起して、島原半島の原城はらのしろにたてこもつた。家光は、たゞちに兵をさし向けてこれを討たせたが、信徒の勢が意外に強く、容易に降らなかつた。そこで、更に兵を増し、城を圍んで兵糧攻にし、翌年になつて、やうやく平げることが出来た。

鎖國

この亂があつてから、幕府はますます天主教の弊害を知り、國民の海外渡航を許さないばかりか、つひにはヨーロッパ人のわが國へ來ることをも、いつさい禁じてしまつた。たゞオランダ人は、天主教の布教に關係しなかつたので、支那人と同じく、長崎ながさきに來て貿易することを許した。かうして、國の出入を鎖とぎしてしまつたので、外國との交通は衰へ、國民は海外の事情にうとくなつた。しかし、この後、太平が長くつゞき、國內の産業や交通が發達し、學問や教育もひろくゆきわたつた。

第三十六 後光明天皇

島原の亂を平げてから、幕府の勢はいよ／＼盛にな

幕府が勢
を京都に
振るふ

つたが、ちやうどこの頃、御英明な第十代後光明天皇が御位にあらせられた。

はじめ家康は、信長や秀吉にならつて、朝廷を敬ひ、諸大名に命じて皇居を御増築申し上げたり、御料を奉つたりしたが、實權はどこまでも自分の手にをさめ、京都には、所司代を置いて幕府の勢力を張ることにつとめた。秀忠はまた、その女むすめを後水尾天皇の后きさきに進め奉り、皇室の外戚ぐわいせきとして勢を振るふやうになつた。したがつて幕府は、だん／＼勢にまかせて、わがまゝのふるまひをすることが多かつた。

皇室の御
めぐみ

御代々々の天皇は、かうした幕府のわがまゝをお戒

後光明天
皇の御英
明

めになると共に、常に國民をおいつくしみになり、また學問を御奨勵になつた。さきに後陽成天皇は、古くからの宮中の御儀式などについて、くはしくおしらべになり、またわが國の古い歴史の書物などを印刷せしめ給うた。後水尾天皇は、和歌をはじめ國史、國文などについて深く御研究になり、廣く國民に學問をおすゝめになつた。

後光明天皇は、後水尾天皇の皇子であらせられ、御年十一歳で御位をおつぎになつた。天皇は、いたつて嚴格な御性質で、御幼少の時から、日課をきめて學問におはげみになり、公卿たちにも學問をおすゝめになつて、

わが國體の尊嚴を明らかにしようとし給うた。天皇

は、日頃幕府のわがまをお歎きになり、折

後を見てこれを戒めよ
光うと思し召した。

明 たまく、後水尾上
天皇が御病氣におか

皇りになつたので、天皇
はたいそう御心配に
なり、たゞちに上皇の

御所へ行幸あらせられる旨を仰せ出された。時の所



後水尾上
皇の御病
氣をお見
まひにな
る

所司代の
申出をお
しりぞけ
になる

司代板倉重宗は、いちおう幕府に問合はせるまでの御
猶豫を、御願ひ申し上げた。すると天皇は、「このやうな
ことを、なぜ幕府に問はねばならぬか。朕の外出がそ
れほど気がかりならば、皇居から上皇の御所まで長廊
下をつけよ。」と仰せられ、御所に行幸になつて、したしく
上皇の御病氣をお見まひになつた。

天皇はまた剣道をお好みになつたが、重宗はこれを
おとづめ申し上げて、「このことが江戸へ聞えると、困つ
たことになります。もしおやめ下さらないなら、臣は
切腹いたさなければなりません。」とお側のものまで申
し出た。すると、それではさつそく席を設けて切腹せ

よ。まだ武人の切腹を見たことがない故、したしく見物するであらう。との仰である。さすがの重宗もこれには恐れ入つて、おわびを申し上げたといふことである。

幕府がわがま、をわつ、しむるやうにな

かやうにして天皇は、幕府のさしでがましいふるまひを、ことごとく御おさへになつたので、幕府もしいにわがま、をつゝしむやうになつた。

しかし天皇は、御位にあらせられること、わづかに十二年で、御病氣のためにおかぐれになつたので、國民は深くお惜しみ申し上げた。

第三十七 徳川光圀

學問がますます發達する

後陽成天皇をはじめ奉り、御代々々の天皇の御奨勵によつて、學問は京都を中心にいぢるしく發達した。江戸においても、家康が國を治めるにはどうしても學問の力によらなければならぬと考へ、林道春らの漢學者を招いて學問をはげまし、また古書をさがし求めてこれを出版させたので、學問をするものがしだいに多くなつた。わけても、五代將軍綱吉は、たいそう學問を好み、自ら書物を講義して人々に聽かせるほど熱心であつた。また、孔子の廟を江戸の湯島に建てて、道春

の子孫にながくこれをまつらせ、こゝに幕府の學問所を開いて生徒を教へさせた。

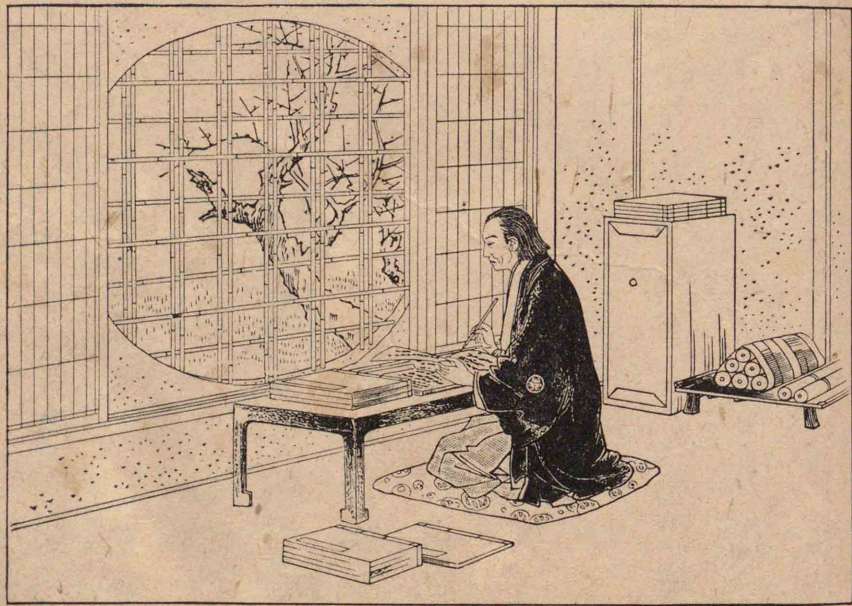
諸大名の中にも、學者を招いて學問にはげむものが多くなつたが、中でも、水戸みとの徳川光圀は、最も熱心であつた。光圀は家康の孫で、生まれつきたいそう賢く、六歳の時、將軍家光の命によつて、兄をさしおいて世嗣よつぎに定められた。成人するにつれて、これを心苦しく思つてゐたが、ある時、支那の歴史を讀み、伯夷はくゐ、叔齊しゅせいといふ兄弟が、互に家をつぐことを譲りあつたといふ話に感激し、自分もぜひ兄の子に家督かどくを譲らうと決心した。かやうなことから、光圀は、深く歴史の尊いことを感じ、世

光圀が歴史を讀んで感激する

大日本史を作る

の人をみちびくには、どうしても歴史によらなければならぬと考へた。

その頃、わが國には良い歴史の書物が少く、ために國民の中には、わが國體の尊いゆゑんをわきまへず、幕府のあることを知つて、皇室の御めぐみをいたゞいてゐる



光圀が大日本史の著述にむげは

ことに、氣づかないものが少くなかつた。光圀は深く

これを歎き、正しい歴史をあ

らはして、國體を明らかにし

西 なければならぬと考へた。

まづ諸方から名高い學者を

山 呼寄せ、ひろく書物を集めて、

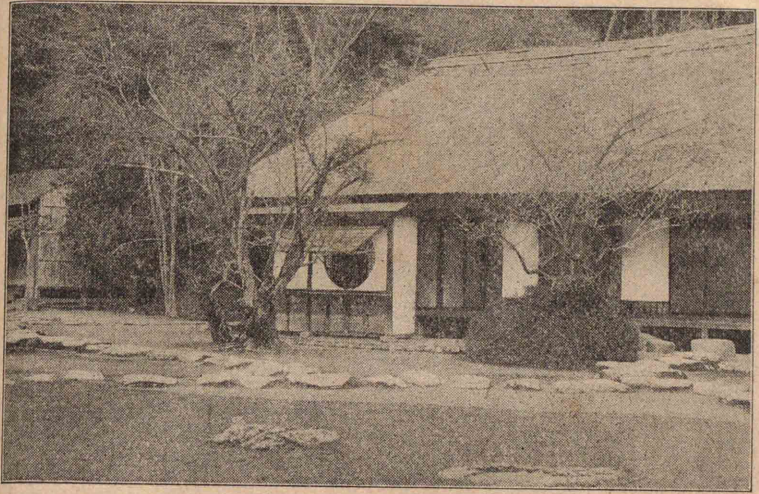
わが國の歴史をしらべさせ

莊 た。光圀自身も熱心に研究

して、大義名分を正し、國體の

尊さを明らかにすること

つとめた。かうした苦心の



末に出來たのが、名高い大日本史で、わが國民の尊皇心をひき起すのに大きな力となつたものである。光圀の時に主な部分は出來上つたが、その後、子孫が代々その志をつぎ、これを作り上げるのに二百五十年もかゝつた。

皇室を敬ひ、忠孝をすゝめる

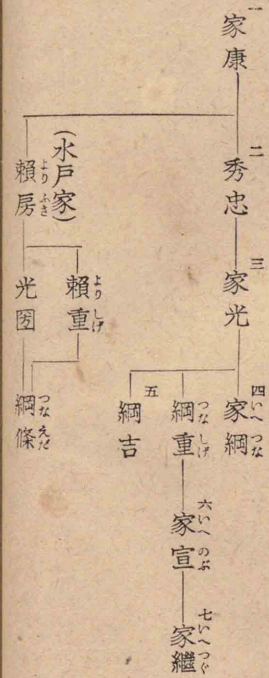
光圀は常に皇室を敬ひ、毎年元旦には、禮服れいふくに身を正して、はるかに京都の御所をふしをがんだ。常に家臣を戒めて、「わが主君は天皇であらせられる。將軍はわが家の本家ほんけである。心得ちがひをしてはならぬぞ。」と言ひ聞かせた。また楠木正成の碑を湊川に建てたり、領内の孝女や貞女ていぢよを賞したりして、大いに忠孝の道を

光圀の質素

すゝめた。

光圀は、やがて家を兄の子に譲つて、西山といふところに隠居したが、その生活はきはめて質素で、居間の天井や壁などは、みづから反古で張り、着物もごく粗末なものを用ひてゐた。

朝廷では、光圀の功を賞せられて、後に正一位をお贈りになつた。



第三十八 大石良雄と新井白石

元禄時代

將軍綱吉の頃は、久しい間太平がつづいたので、國民の生活はしぜん向上し、民間にも學問がひろくゆきわたると共に、俳句、小説などの文藝や浄瑠璃、芝居などが盛になり、世の中の風俗がいつぱんにはでやかになつた。世にこの頃を元禄時代といつてゐる。

一方、武士はいつぱんに太平になれて、尚武の氣風を失ひ、綱吉もはじめは學問をすゝめて世人を導いたが、後には政治を急つたので、幕府の政治はしだいにゆるんで來た。



良雄が主の仇を討つ

かやうな時代に、後の世までも武士のかゞみとうたはれた、赤穂四十七士の仇討があつた。播磨赤穂の城主浅野長矩の家臣であつた大石良雄をはじめ、四十七人の武士が、心を合はせて苦心のすゑ、主の仇、吉良義央を討取つたのである。

ひ、後、京都に出て、伊藤仁齋に漢學を學び、文武兩道に通じてゐた。しかも、へいぜい少しも自分の才能を人に示さうとしなかつたので、中にはこれをあなどるものもあつたが、仁齋などは、かへつてその人となりに感心してゐたといふことである。良雄が常に所持してゐた小刀に、萬山重からず、君恩重し。一髪輕からず、我が命輕し。と彫りつけてあつたのを見ても、良雄のへいぜいの心がけがうかゞはれる。良雄の子良金も、智勇人にすぐれ、年わづかに十五歳で、同志に加つてめざまし

い働きをした。

綱吉は、良雄らが主のために苦節をつくしたのをほめ、また幕府の中にも、その命を助けたいと思ふものが多かつたが、かねて幕府は、大勢のものが徒黨を結ぶことを堅くさしとめてあつたので、良雄らは、幕府のさばきに從つて、いさぎよく切腹した。

良雄らの義烈な行は、世人に深い感動を與へ、その後、忠臣藏といふ芝居にもしくまれて、赤穂義士の譽はいよいよ高くなつた。東京高輪の泉岳寺にある義士の墓前には、今もなほ香華の絶えまがない。

白石が家

綱吉がなくなると、家宣家繼がひきつゞいて將軍と

宣に重く
用ひられ
る

なつた。この二代に仕へて、前代の政治を改めたのが新井白石である。白石は上總の人で、貧しい家に生まれたが、幼い時から志を立てて苦學をした。後、江戸の名高い學者木下順庵の弟子となつて、一心に勉強したので、その學問はいよいよ深くなつた。師の推薦によつて家宣に仕へ、やがて家宣が將軍となると、重く用ひられて、幕府の政治にあづかつた。

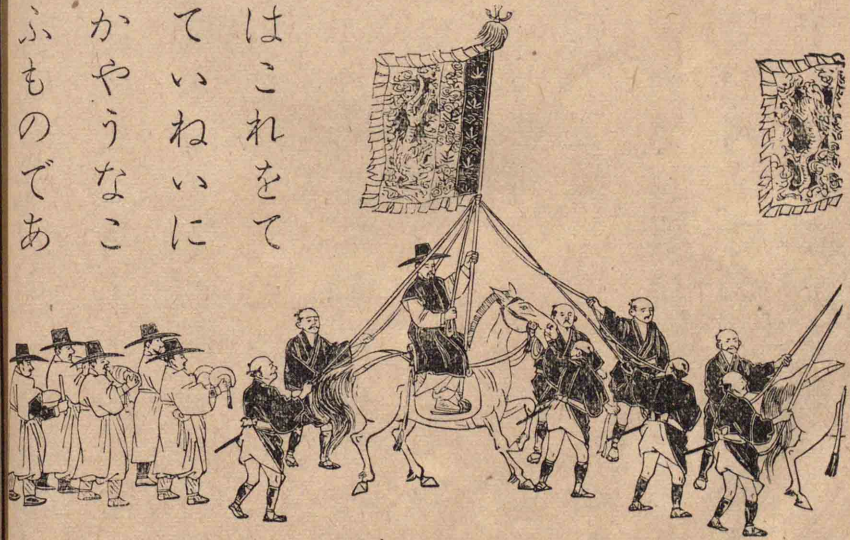
白石の尊
皇

これまで朝廷では、皇太子にお立ちになる御方の外は、皇族はたいてい出家せられる御習はしであつた。白石はおそれ多いことであると考え、このことを將軍に申し述べたので、將軍は宮家をお立て下さるやうに

と朝廷に申し上げた。時の
第四百十代中御門天皇は、この意見
をお取上げになつて、新たに
閑院宮家をお立てになつた。

朝鮮の使
者のもて
なし方を
改める

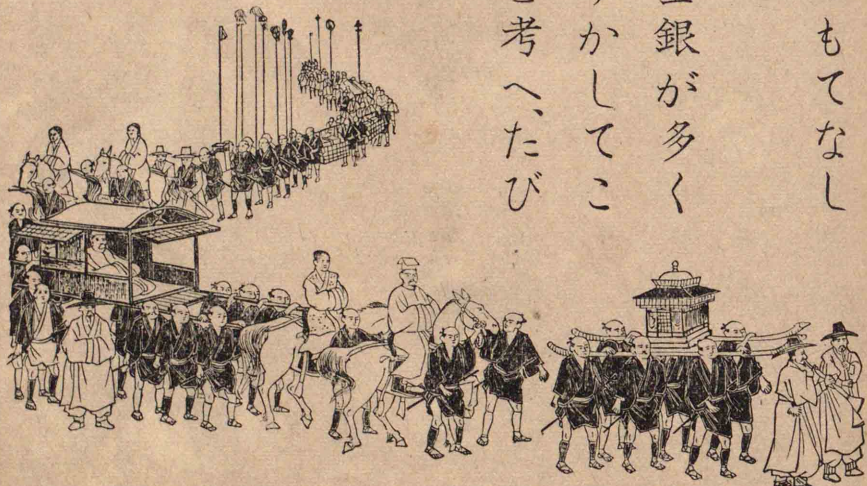
朝鮮は、家康が交を開いて
から、將軍の代がはりごと
に、わが國へ祝ひの使者を送る
きまりになつてゐたが、幕府はこれをして
あつくもてなし、勅使よりもていねいに
する有様であつた。白石はかやうなこ
とは、わが國の體面をそこなふものであ
ると論じ、將軍にすゝめて、そのもてなし
方を改めさせた。



朝鮮の使

外國貿易
を制限す
る

この頃、外國貿易のために、金銀が多く
國外へ流れ出た。白石はどうかしてこ
れを防がなければならぬと考へ、たび
たび家宣に意見を申し述べ
た。家宣の時になつてはじ
めてそれが取上げられ、貿易
の額を制限したので、やうや
く金銀が國外へ多く出るの
を防ぐことが出来た。



者の行列

多くの書物をあらはす

白石は政治家としてばかりでなく、學者としても名高い人であつた。吉宗が八代將軍になると、幕府を退いてもつばら著述ちよじゆつにはげみ、多くの書物をあらはした。

第三十九 徳川吉宗

よく藩を治める

將軍吉宗は、家康の曾孫そうそんで、紀伊家に生まれた。幼い時から人にすぐれて賢かつたが、末子ぼしの身であつたので、十四歳の時家を出て小藩の主となつた。貧しい藩で何事も不自由であつたが、しもぐりのものもののくらしを思ひやつて、自分も質素な生活をつづけ、また産業を興してよく藩を治めた。吉宗は常に朝廷を敬ひ、人が

儉約をすすめる武事をほげます

朝廷の事を話す時には、必ずあずまひを正して、これを謹聽きんちやうしたといふことである。二人の兄が相ついでなくなつたので、紀伊家に歸つてその後をつぎ、よく領内を治めた。

たまく、將軍家繼が幼少でなくなり、世嗣がないため、迎へられて將軍職についた。その頃は、白石がいろいろの政治の改革を行つた後であつたが、武士はいつぱんに武藝をかへりみず、ぜいたくな生活をしてゐた。吉宗は、まづ儉約の命令を出し、自分も木綿もめんの着物を用ひ、金銀をちりばめた城門などはこれをとりこはさせ、手本を示した。また、大勢の武士をひきつれて、たび

たび鷹狩たかがりや水泳すゐえいを行ひ、オランダ人を招いて部下に馬

裁判を公平にする



吉宗が鷹狩をもよほす

術を練習させなどして、大いに武事をはげましたので、武士の氣風がしぜんに改つた。吉宗は幕府の威信を人々に知らせ、安心してその生活を樂しませるためには、公平な裁判を行はなければならぬと考へた。そこで、將軍となる、たゞちに伊勢の山田奉行として名望のあつた

大岡忠相おほおかたけをあけて、江戸の町奉行まちぶぎやうとした。また御定書おさだめがき百箇條ひゃくかじょうを作つて、裁判の標準へうじゆんを定め、公平な裁判を行ふことにつとめた。

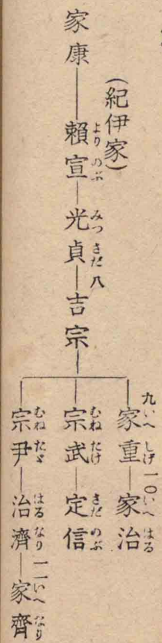
産業に力を入れる

吉宗は、産業を興すことにも、大いに力をつくした。まづ、農業がその本であると考へ、灌漑くわんがいの便をよくし、新田の開墾を奨励したので、米の産額ははかに増した。また甘藷かんしょが飢饉ききんの時に役立つことを知つて、青木昆陽あおきこんやうに命じてその作り方をしるさせ、それと種芋たねいもとを諸國にひろめさせた。その頃、砂糖はすべて支那から輸入し、價も非常に高かつたので、吉宗は、甘蔗かんさの苗を取寄せ、これを城中に植ゑて、砂糖を製造させた。諸大名もこ

洋學が發達する

れにならつて、産業の奨励に心がけたので、諸國の名産がしだいに増すやうになつた。

吉宗は、西洋の學術が人々の生活に有用であることを知り、これを取入れようと考へた。そこで、今までいっさい禁じてゐたヨーロッパ人の著書で、キリスト教に關係のないものは讀むことを許し、なほ青木昆陽らにオランダ語を學ばせた。これから國民の中には、西洋の學術を研究するものがしだいにあらはれ、洋學が發達した。



第四十 松平定信

幕府に用ひられる

吉宗がなくなつた後しばらくの間、國內はおだやかであつたが、やがてまた政治がゆるんで來た。その上暴風や洪水などがたびくあつて、飢饉が重なつたので、世の中はしだいに騒がしくなつた。かうした時に、家齊が十一代の將軍になつたが、まだ幼少であつたので、松平定信がこれを助けた。

定信は吉宗の孫である。幼い時から學問が好きで、上達が早く、十三歳の時、書物をあらはして、人々を驚かしたほどであつた。生まれつき短氣であつたが、ひろ

定信のおひ立ち

儉約をす
すめる

く古今ここんの書物を讀んで深く感じ、みづから戒めて行を
つゝしんだ。やがて、松平氏をついで、奥州白河しろかはの藩主
となり、よく領内を治めて、たいそう人望があつた。
幕府に招かれた時、定信は一命をすてて、政治に當ら
うと決心し、大名をはじめ世の人々に、きびしくおごり
の風を戒め、衣服や家具かぐの新調しんてうを見合はさせ、ぜいたく
な品を少しも用ひさせなかつた。またへいぜい儉約
してあまつた米や錢を貯蓄させ、飢饉の時などの用意
をさせた。

文武をば
げます

定信は、當時のゆるんだ風俗を正すには、第一に武士
の氣風を改めなければならぬと考へ、江戸市中にた
くさんの道場を開かせて、大いに武術を奨勵した。一
方、湯島の學問所を大きくし、柴野栗山しばのりつざんらの學者を招い
て學問を盛にした。諸大名もこれにならつて、しきりに
文武の道をはげまし、領内の人心をひきしめたので、
世の風俗がしだいに改まつた。

皇居の御
造營につ
とめる

定信は常に皇室を敬つた。たまく、京都に大火が
あつて、おそれ多くも災わざはひが皇居にまで及んだ。定信は、
將軍から皇居御造營の命を受けて、京都に上り、みづか
らその工事を指圖した。まづ學者を招いて、昔の皇居
をくはしくしらべさせ、古式によつて、りつぱに御造營
申し上げた。

第九十代

光格くわかく天皇は、たいそう御満足に思し

召し、御太刀などをたまはつて、定信の功勞をおほめになつた。

かうして、国内は治まり、人々は平和を楽しんでゐたが、思ひがけない心配が國外から起るやうになつた。家光が鎖國した頃にくらべると、國外の事情は全く變つてしまつた。鎖國當初、勢を振るつてゐたポルトガル・イスパニヤ・オランダなどはすでに衰へ、代つて盛になつたイギリス・フランス・ロシアなどが、この頃新しい植民地を得ようとして東洋に目をつけ、あらそつて勢力を張ることにつとめてゐた。

この頃、仙臺に林子平といふ人があつた。若い時か

ヨーロッパ人が東洋に侵入する

林子平が海防を唱へる

ら學問や武藝をはげんだが、特に地圖を見ることが好きで、折さへあれば、諸地方を旅行して、實地につき熱心にこれを研究した。長崎に行つた時、オランダ人からしたしく外國の様子を聞いて、今は一日も海防をなほざりにしてはおけないとさとり、海國兵談をあらはして、わが國は四面みな海であつて、江戸の日本橋からヨーロッパまで水路がつゞいてゐる。もし先方が攻めて來ようとすれば、何處にでも來ることが出来る。その備を怠つてはならないと述べて、世人を戒めた。しかし幕府は、まだ外國の事情にうとかつたので、子平の説は、いたづらに人心を惑はすものとして、その書物

海防に意
を用ひる



定信が海岸を巡視する

や版木はんぎを取上げ、子平
を罰した。

ところが、子平の罰
せられた年、すなはち
光格天皇の寛政四年
に、ロシアの船が根室
に来て、通商を請うた。
何の準備もなかつた
幕府は、驚いてその申
出をしりぞけたが、こ
こにはじめて海防の

幕府の勢
力が衰へ
はじめ

國學が起
る

大切なことをさとつた。定信はみづからけはしい山
や谷を越え、伊豆や相模などの海岸を巡視した。

定信が職を辞した後は、將軍家齊がみづから政治を
行つたが、やがて心がゆるんで、奢侈しやしにふけるやうにな
り、幕府の勢力は、しだいに衰へはじめた。

第四十一 本居宣長もとむりのりなが

さきに、徳川光圀が大日本史の編纂へんさんをはじめてから、
國史の研究が盛になり、わが國體に對する自覺がした
いに高まつて來た。しかも、わが國體を明らかにする
ためには、日本の古い書物を研究して、古代の精神をは

つきり知ることが大切であるので、古語古文の研究をする學者が、つきくにあらはれるやうになつた。かうして起つた學問を、國學といつてゐる。

元祿の頃、大阪に契沖けいちゆうといふ僧がゐて、古語にくはしく、光圀に頼まれて、萬葉集の解釋をした。萬葉集はわが國最古の歌集で、歌は雄大明朗であり、特に古代の人の皇室に對する至誠を述べた歌が多い。ついで、荷田春滿かとうはるみ、賀茂真淵かもまづみ、本居宣長らが出て、ますます國學の研究につとめた。

宣長の
ひたち

宣長は寛政の頃の人で、伊勢の松阪まつさかに生まれた。幼い時に父を失ひ、母の手で育てられたが、母は非常な賢

母であつた。宣長は何よりも讀書が好きで、すぐれて物覚えがよかつた。京都へ出て勉強してゐた頃、契沖のあらはした書物を讀んで、國學に志し、後、真淵の弟子となつて研究をつみ、つひに一代の大學者となつた。

古事記傳
をあらは
し國體を
明らかに
する

この頃、漢學者は、ともすると支那を尊び、わが國を卑しむ風があつた。宣長は大いにこれを歎き、わが國體が萬國にすぐれてゐることを明らかにしようと考え、多くの書物をあらはした。中でも名高い古事記傳は、わが國最古の書たる古事記をくはしく研究したもので、宣長はこれがために、三十餘年の長い年月を費した。宣長は常に質素な四疊半の書齋よこひんに閉ぢこもつて、夜と



宣長が著述にむけは

なく晝となく著述にはげ
 んだ。疲れを覚えると、部
 屋のすみにかけてある鈴
 をならして、その音に心を
 なくさめては、また筆をと
 った。その書齋を鈴の屋
 と名づけたのは、これがた
 めである。

宣長は櫻の花を愛し、み
 づからゑがいた肖像に題

して、

敷島しきしまの大和心やまとこころを人とはば

朝日あさひにほふ山櫻花やまざくらばな

と歌つたが、この歌はわが國民の精神をよくよみあら
 はしてゐるので、今に至るまで世にもてはやされてゐ
 る。

宣長には、全國にわたつて、五百人に近い弟子があつ
 た。これらの人々は、いづれも師の志をついで、國學を
 研究し、その説を唱へたが、中にも平田篤胤ひらたあつたねは、最も尊皇
 愛國の精神を鼓吹こすいした。

國體の尊
 いわけを
 するもの
 が多くな
 る

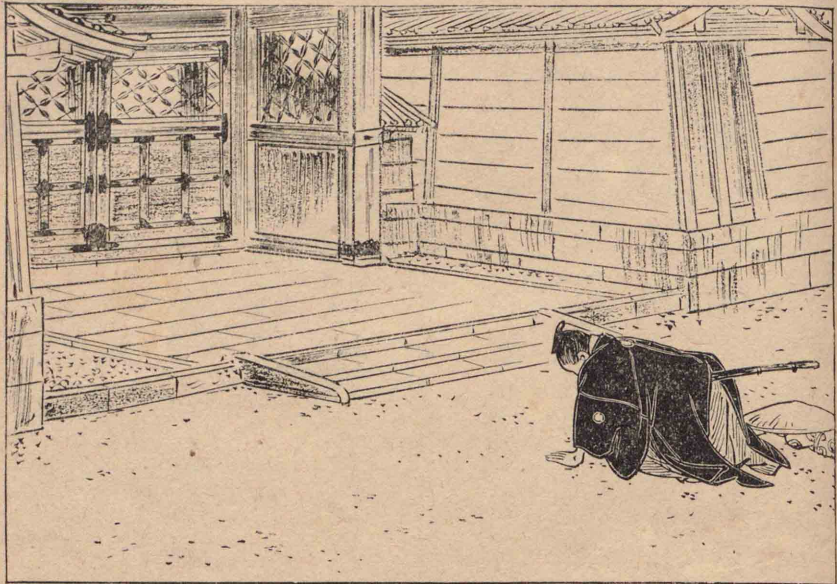
第四十二 高山彦九郎と蒲生君平

尊皇運動
がはじま
る

國體の尊いゆゑんが明らかになるにつれて、幕府がほしいまゝに政治を行ふのは、正しくないと言するものが、つぎくゝにあらはれるやうになつた。

第六十代 桃園天皇の御代、京都に竹内式部、江戸に山縣大貳らがあらはれ、尊皇の大義を説いて、幕府の行を非難攻撃したので、幕府はこれらの人々を重く罰した。しかし、ひとたび人々の心にもえ上つた尊皇の精神は、幕府の力をもつてしても、おさへられるものではなかつた。

高山彦九郎の尊皇



高山彦九郎が御所をふしむ

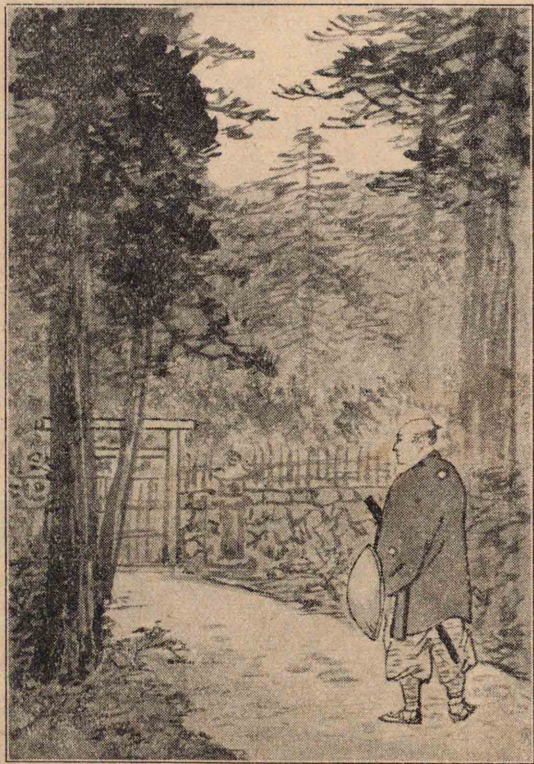
光格天皇の御代には、高山彦九郎、蒲生君平が出て、共にその一生を尊皇のためになげた。彦九郎は上野の人である。生まれつき氣性の強い、しかも孝心の深い人であつた。十三歳の時、太平記を読んで、楠木氏や新田氏などの忠臣の行に深く感激したが、成長するにつ

れて、いよく忠義の心が深くなつた。彦九郎は、學者や徳行のある人々を訪ね、ひろく諸國を廻つて、熱心に尊皇の大義を説いた。京都を過ぎる時は、必ず御所を拜し、御門の前にひざまづいて心からふしをがんだ。後、筑後の久留米で、時勢を歎いて自害したが、息をひきとるまで、かたちを正して、はるかに京都の方を拜してゐたといふことである。

君平は下野の人である。幼い頃から讀書を好み、學問にはげんだ。ひろく古今の書物を讀むにつれて、朝廷が長い間、御不自由をしのんでおいてになることを知り、たいそう悲しんだ。

蒲生君平
の尊皇

君平は、當時、御歴代の御陵が荒れてゐることをもつたいなく思ひ、神武天皇の御陵をはじめ、多くの御陵をとりしらべ、遠く佐渡にある順徳天皇の眞野の御陵や、讚岐の崇徳天皇の御陵にも巡拜した。かうして山陵志といふ書をあらはしたのであるが、君平はこれを朝廷に奉り、また幕府にもさし出した。山陵志が世に



君平が眞野の御陵に参拜する

出てから、今まで世の中に知られてゐなかつた御陵もはじめ明らかなになり、荒れてゐた御陵は、後に修理せられることとなつた。

明治の御代、朝廷では、式部大貳彦九郎君平らの忠節をおほめになつて、正四位をお贈りになつた。

第四十三 攘夷と開港

寛政四年、ロシアの船が來航した時、幕府は通商の申出を許さなかつたが、その後、ロシア人はしばしば樺太や千島へ入りこんで、漁場を荒したり、掠奪をしたりした。その上、イギリス船も長崎へ來て亂暴を働いたの

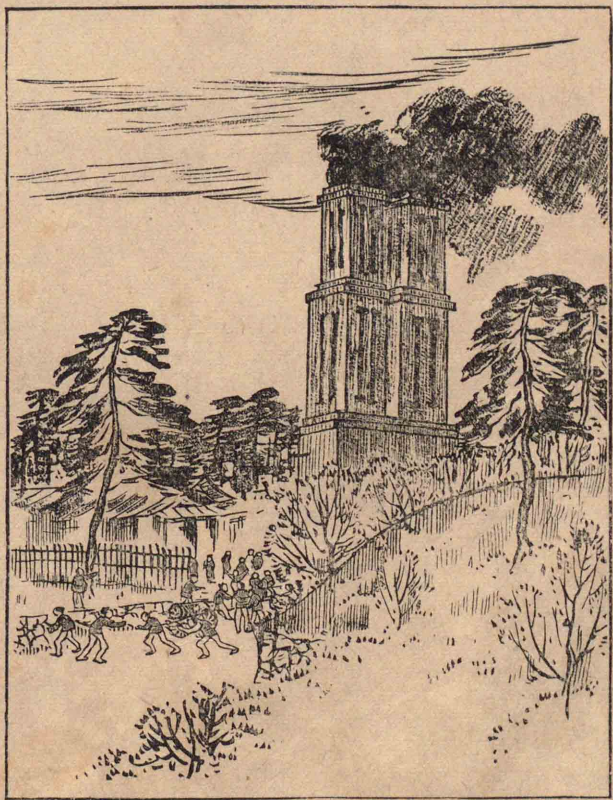
攘夷論が起る

で、國民の中にはこれを憤るものが多くなり、しだいに攘夷の論が起つた。そこで幕府もますます海防を嚴重にし、仁孝天皇の文政八年には、わが近海に近寄る外國船は、ようしやなくうち攘へといふ命令を下した。

諸大名の中にも、攘夷の論を唱へるものが多かつたが、最も強くこれを主張したのは、水戸藩主徳川齊昭である。齊昭は剛毅な人で、弘道館といふ學校を建て、大いに文武の業をはげまし、多くの大砲を鑄て海防に備へた。光圀の志をついで、深く皇室を尊び、毎年元旦はもとより、先帝の御忌日には、必ず身を清めて京都の

徳川齊昭が尊皇攘夷の論を唱へる

御所を遙拜し、常に家臣を戒めて、皇室を敬ひ奉らしめた。齊昭は、かねてから時勢のなりゆきを深く心配して、あたので、率先して攘夷論を唱へ、天下の人心をひきたてて、國威をきずつけぬやうにつとめた。これから尊皇攘夷の論はますます、勢を得て、大いに人心を動かした。



齊昭が盛大に砲を鑄る

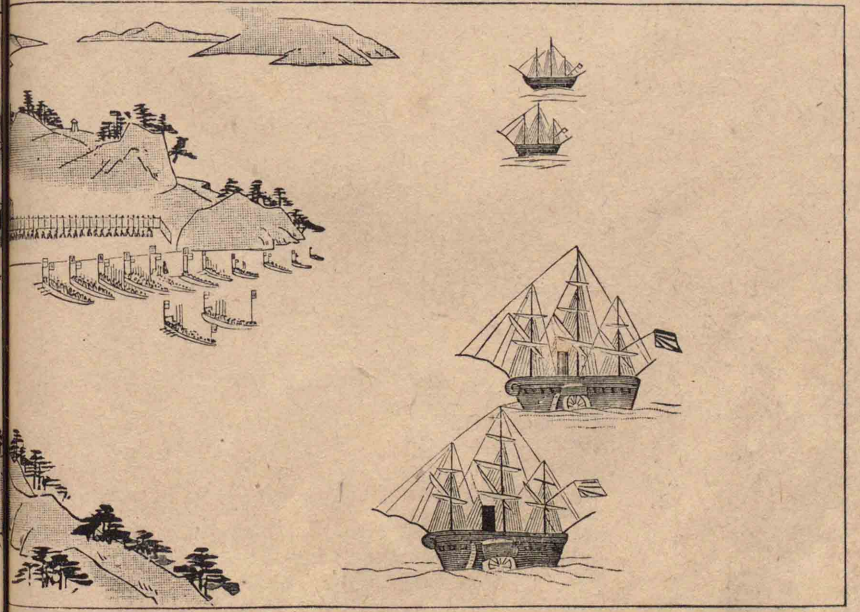
開港を唱へるものが出る

攘夷が盛に唱へられる一方、また開港を主張するものも少くなかった。渡邊華山、高野長英などはその主人であつた。これらの人々は、洋學によつてひととほり海外の事情に通じてあたので、今いたづらに外國と事をかまへず、通商を許した後、國力を養つて、國威をあげるべきだと主張したのであつた。幕府は、世間を惑はすものとしてこれを罰したが、やがて本多利明や佐藤信淵などのやうに、開港の急を説き、進んで海外に植民地を開拓し、國力を伸ばさなければならぬと主張する學者があらはれた。幕府も、前に下した外國船うち攘ひの命令を幾分ゆるめるやうにした。

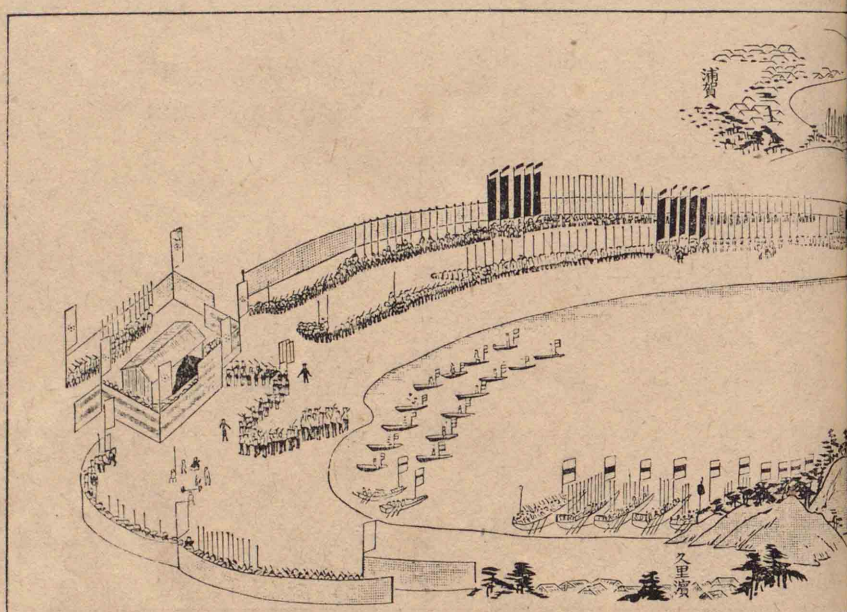
合衆國の使節ペリーの來朝

第一百二代 孝明天皇の嘉永六年、アメリカ合衆國の使節ペリーが軍艦四隻をひきゐて、相模の浦賀に來て、和親を結び通商を開いてもらひたいと申し出た。事があまりに重大で、幕府では容易にきめることが出来なかつたので、翌年を約束して、ひとまづペリーをかへした。幕府はこの事を朝廷に申し上げると共に、諸大名にもそれぞれ意見を述べさせたが、攘夷か開港か、意見はまちくで、世の中はますます騒がしくなつた。かうした間にも、皇室を中心に國民が心を一つにして、事に當らなければならぬと説く尊皇

第四十三 攘夷と開港



使の國衆合カリメア



朝來の一り節

の聲が、いつそう高まつていった。

第四十四 攘夷と開港(つゞき)

幕府の方針がまだ定まらないうちに、早くも年が改つて、安政元年となつた。ペリーは再び軍艦をひきあ

て武藏の神奈川沖に来て、さきの返答を求めた。幕府は今更ことわることも出来ないので、とりあへず和親條約を結び、伊豆の下田、北海道の函館の二港を開いて、燃料や



和親條約を結ぶ

通商條約を結ぶ

食料などの必要品を與へることを約束した。まもなくアメリカ合衆國は、ハリスを總領事として、わが國に遣はして來た。ハリスは下田港にあたが、やがて將軍家定に謁し、世界の大勢を説いて、通商を開くことを極力すすめたので、幕府もこれに同意し、通商條約の草案を作つて、勅許をあふぎ奉つた。

ところが開港については、まだ國論がまとまらず、これに反對するものが多かつたので、孝明天皇はたいそう御心配になり、なほよく諸大名と評定の上申し出るやう、お諭しになつた。けれども、ハリスからの催促がますますきびしいので、幕府はその處置に困り、つひに

勅許を待たないで、アメリカ合衆國と通商條約を結び、
 下田・函館の外に神奈川・長崎・新潟・兵庫の四港を開いて、
 貿易場とすることを約束した。時に安政五年で、これ
 を安政の假條約といふのである。ひきつゞいて、オラ
 ンダ・ロシヤ・イギリス・フランスの四國とも、同じく通商
 條約を結んだ。徳川齊昭らの大名をはじめ天下の志
 士は、時の大老井伊直弼の處置を責め、天下はいつそ
 騒がしくなつた。

家茂を將
 軍に迎へ
 る

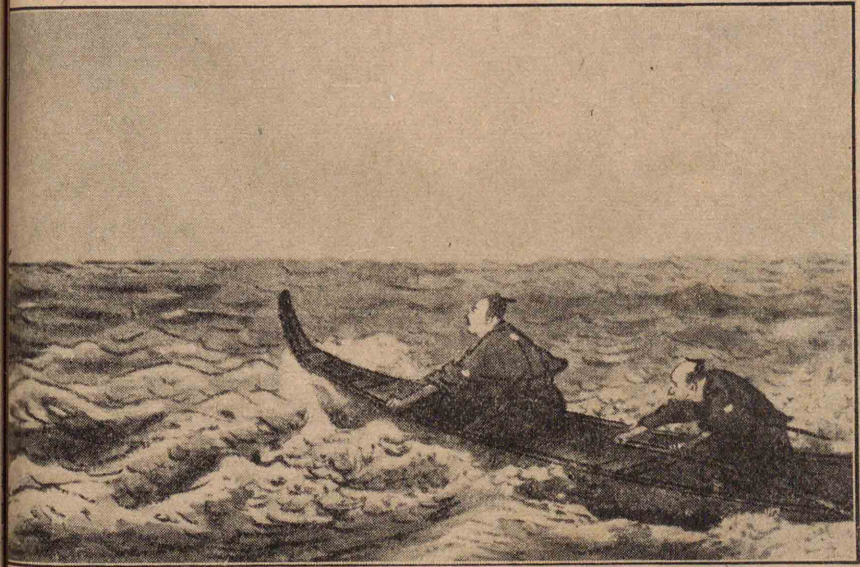
時に、將軍家定には子がなかつたので、世嗣を定める
 必要が起つた。内外共に事の多い時であるから、諸大
 名は、齊昭の子で賢明の間の高い慶喜を迎へたいと望
 んだが、直弼は將軍の内命を受けて、紀伊家からやうや
 く十三歳の家茂を迎へて世嗣と定めた。まもなく家
 定がなくなり、家茂はこの多難な時勢に十四代の將軍
 となつた。かうした將軍の世嗣の問題も加つて、直弼
 を非難する聲はいよ／＼はげしくなつた。

安政の大
 獄

直弼はこれらの人々をおさへようとはかり、齊昭や
 慶喜らに謹慎を命じ、志士數十人を捕らへて江戸の獄
 屋につなぎ、重く罰した。世にこれを安政の大獄とい
 つてゐる。

吉田松陰も罪を受けた志士の一人であつた。松陰
 は長州の藩士で、國を思ふ心が深く、常に尊皇の大義を

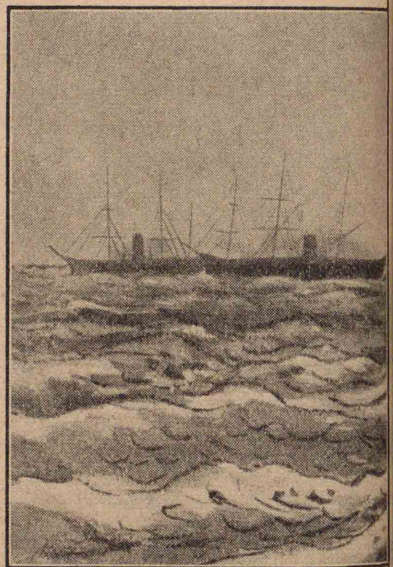
説き、松下村塾を開いて人材の養成につとめた。かつて外國の事情をさぐるために、ひそかにアメリカ合衆國に渡らうとして、罰せられたことがあつたが、今また捕らへられて、死刑に處せられた。この外、橋本左内、頼三樹三郎、梅田雲濱など多くの志士が、いたましい最期をとげた。



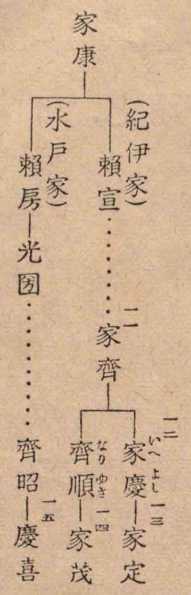
松陰が外國の事情をさぐる

櫻田門外の變

直弼のきびしい處分を憤るものは、いよ／＼多くなり、萬延元年三月三日、直弼はつひに水戸の浪士らのために、櫻田門外で刺された。直弼のたふれた後は、長州藩をはじめとして、國內いたるところに尊皇攘夷を論ずるものが起り、幕府の勢はいよ／＼衰へるばかりであつた。



うすとす

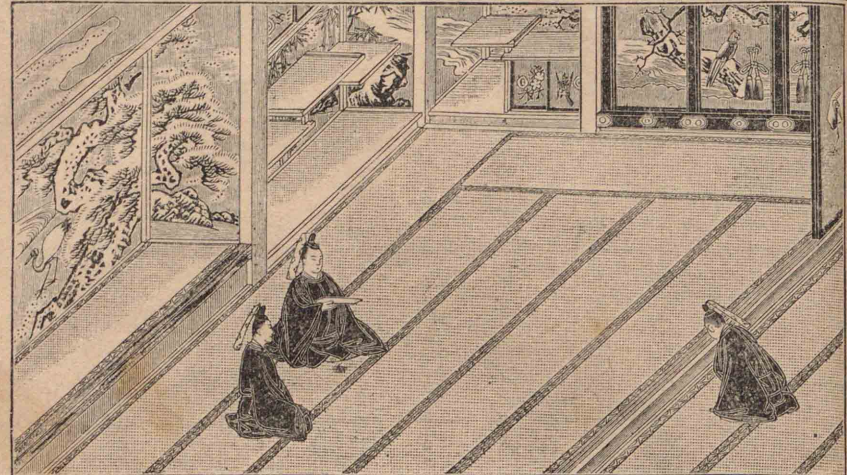


第四十五 孝^{かうめい}明天皇

國民をお導きにする

孝明天皇は、御生まれつき英明剛毅であらせられ、國初以來かつてない困難な時勢に際し、深く大御心を用ひさせ給うて、ひたすら國民をお導きになつた。當時、尊皇論を唱へる人々の中には、一日も早く幕府を倒さうと考へるものが多かつたが、天皇はこの難局をきり開くためには、朝廷の下に幕府も國民も力を合はせて、事に當らなければならぬとお考へになつた。さうして、勅使を江戸にお下しになつて、慶喜を將軍家茂の後見役とし、政治を一新するやうにお命じになつた。

家茂が勅を奉じて攘夷の期を定める



實美が勅を將軍家茂に傳へる

天皇は、外交の問題については、殊の外御心配になり、わが國威をきずつけぬやうにと、常に幕府をお諭しになつた。その上、國事は何事によらず朝廷に奏上させ、諸大名の意見を十分にたゞすやうにと仰せられた。しかし、幕府の勢は衰へて、容易に國論を統一することが出来なかつた。

文久二年、天皇は三條實美ら

を勅使として江戸に下し、早く攘夷の方針を立てて、天下の人心をしづめるやうにと仰せつけになつた。將軍家茂はつゝしんで仰に従ひ奉り、翌文久三年、京都に上り、その年の五月十日を期して、攘夷を實行すること、を朝廷に奏上し、また諸大名にもこれをしらせた。

いよくその期日になると、長州藩は、下關海峡しものせきかいで外國船を砲撃し、ついで攘夷の親征しんせいを朝廷に願ひ申し上げた。ところが、一方、薩摩さつまや會津などの諸藩は、溫和論わんわ論を唱へ、この際、御親征をお取止めになるやうに朝廷に申し上げたので、朝廷では御評議ごひやうぎの末、つひに攘夷の御事をお取止めになつた。さうして長州藩の御所守

攘夷の御事をお取止めにな

衛ゑいを免じ、藩主らの入京をおさしとめになつた。

そこで、長州藩士らは、無實の罪を訴へようとして、大勢京都に上つて來たが、薩摩や會津などの藩兵がこれをさへぎり防いだので、戦が所々に起つた。中でも蛤御門はまごもんの戦は、最もはげしく、おそれ多くも流彈りゅうだんが宮中に飛ぶほどであつた。

蛤御門の變

長州征伐

長州の兵は敗れて退いたが、朝廷では、みだりに宮門にせまつて兵火を開いた罪を責めて、長州追討つゐたうの命を幕府にお下しになつた。幕府は、諸藩に命令して、海陸から進み討たせたが、まだ戦はないうちに、長州藩主がひたすら謹慎の意をあらはし、罪をわびたので、追討の

軍はひきあげた。

しかし幕府はなほもきびしく長州藩を處分しようとして、再びこれを討たせたが、この頃幕府の威信はすでに地におちて、諸大名の中には出兵の命に従はないものがあり、幕府の兵はいたるところで敗北した。たまたま家茂が病にかゝつてなくなつたので、朝廷では戦の中止を命ぜられ、後、更に征伐の軍を解散せしめられた。家茂のあとをついで、慶喜が十五代の將軍に任ぜられた。

天皇の御盛徳

まもなく孝明天皇は、御病のため、御年三十六歳で崩御し給うた。天皇は、御幼少の御身で御位をおつぎになつたが、内外多事多難の折であつたので、片時も御心をやすめ給ふ暇とてなかつた。かつて外交の問題で



孝 明 天 皇

世の中が騒がしかつた時、天皇は勅使を伊勢にお遣はしになり、宸筆の願文を神宮

に奉られ、國難を除くことをお祈りになつたが、勅使が都に歸るまで、毎夜お庭にお出ましになつて、神宮を遙

拜し給うたといふことである。當時、皇室の御費用は乏しくて、たいそう御不自由であらせられたが、天皇は少しも御心にかけてさせ給はず、いつも萬民をお憐みになつた。國民もまた、天皇の御徳をあふぎ奉り、朝廷の御威光は、年ごとに高まつて、しだいに一切の政治が朝廷にかへる機運きうんが開けていつた。

第四十六 大政奉還たいせいほうくわん

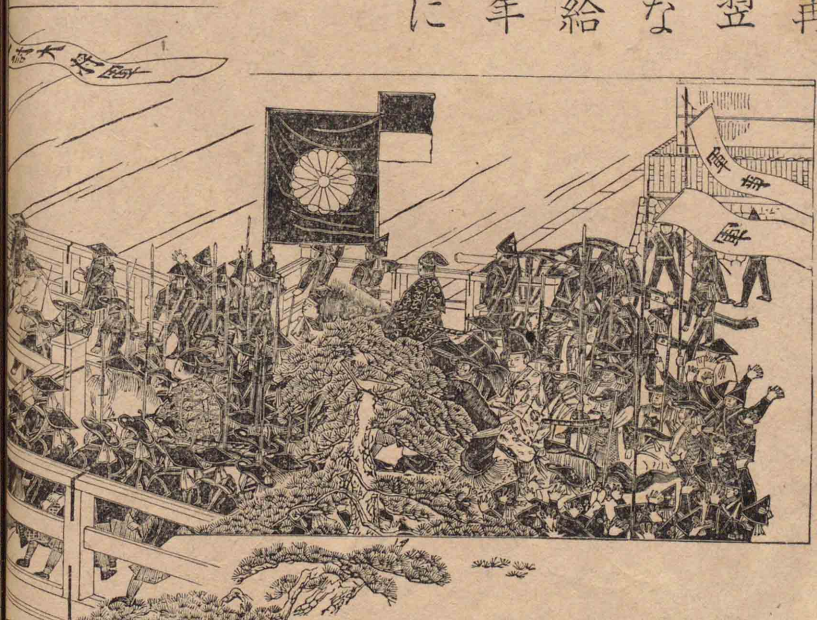
慶喜が大政を朝廷にお還し申し上げる

孝明天皇がおかくれになると、第百二十代明治天皇が御位をおつぎになつた。その頃、幕府の勢は全く衰へて、させまつた國事を裁きさば、國威を保つだけの力はなかつた。そこで、岩倉具視いわたららの公卿は、ひそかに薩摩藩士大久保利通おおくぼ、西郷隆盛さいごう、長州藩士木戸孝允きとらといつしよに、幕府を倒さうとはかつた。土佐の前藩主山内豊信やまうちはこのなりゆきを心配し、家臣後藤象二郎ごとうを慶喜のもとに遣はして、たちちに大政を朝廷にお還しかへ申し上げることをすゝめさせた。慶喜は元來尊皇の志があつく、またよく時勢を見ぬいてゐたので、豊信のすゝめに従ひ、その旨を朝廷に奏上すると、天皇はこれをお聽入れになつた。時に紀元二千五百二十七年、慶應三年けいおうで、家康が征夷大將軍に任ぜられてから、二百六十五年の後であつた。前後およそ七百年の長い間つゞいた武家

政治もこゝに終をつけ、再び皇政の古に復つた。翌年、即位の禮をお舉げになつて、年號を明治と改め給ひ、以後御一代の間は、一年號をお用ひになることにお定めになつた。

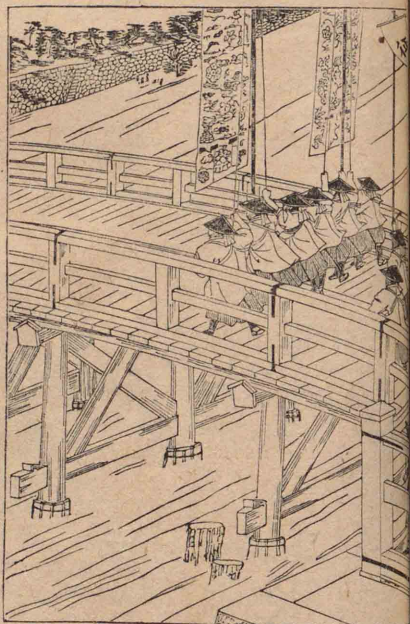
鳥羽伏見の戦

大政を奉還した後も、慶喜はなほ内大臣の官職にあつて京都にゐたが、朝議の結果は、その官



征討大將軍彰親王

職をやめ、幕府の舊領をも返上させることになつた。幕府の舊臣をはじめ、會津・桑名などの藩士は、これを聞いて不安に思ひ、形勢はおだやかでなかつた。慶喜は事變の起ることを恐れて、いつたん大阪に退いたが、つひにこれらの人々をおさへきれず、再び京都へ入らうとした。薩摩や長州の兵は、これを鳥羽伏見に迎へ撃ち、はげしい戦となつた。そこで朝廷では、小松宮彰仁親王を征討大將軍に任じ給ひ、錦



の御進軍

の御旗をひるがへして進軍せしめられた。官軍の士氣はいよ／＼あがり、慶喜の軍をうち破つて、大阪にせまらうとした。そこで慶喜は、急ぎ大阪から海路江戸へ逃歸つた。

慶喜の恭順

朝廷では、慶喜の官位や幕府の舊領を取上げられ、更に有栖川宮熾仁親王を東征大總督とし、西郷隆盛らを參謀として、大軍をもつて江戸へ向かはしめられた。一方、慶喜は自分の悪かつたことを深く後悔し、上野にひきこもり、ひたすら謹慎してゐた。この時、さきに將軍家茂に御降嫁あらせられた靜寛院宮親子内親王は、使を京都にお遣はしになつて、徳川家に對する寛大な

御處置を願はせられた。また慶喜の家臣山岡鐵太郎や勝安芳は、死を決して單身隆盛と會見し、慶喜の意を傳へてその罪を謝した。隆盛も慶喜の誠意に感じてとりなしにつとめたので、大總督の宮の命令が下つて、江戸進撃はとゞめられた。まもなく、朝廷では、江戸城及び兵器を取上げ、慶喜の罪をおゆるしになつた。かうして



西郷隆盛と勝安芳の會見

徳川の家名も絶えずにすみ、江戸の市民も兵火の災からまぬかれることが出来たのである。

全国がこ
とごとく
しつまる
彰義隊

しかし、この時になつても、まだ徳川氏の舊恩を思つて、順逆をあやまるものもあつた。中でも、慶喜の恭順を不満に思つた幕府の舊臣らは、彰義隊を組んで上野にたてこもつた。大總督の宮は、たゞちに解散をお命じになつたが、従はなかつたので、やむなくこれをうち破らしめられた。また、會津藩主松平容保は、奥羽の諸藩と相應じて、若松の城にたてこもつたが、激戦をくりかへすことおよそ一箇月、つひに力つきて降つた。この間に、藩中の白虎隊と名づける少年の一團は、はなば

白虎隊

五稜郭

なしく戦つてつぎぐに討死し、わづかに残つた十九人は、城の東北、飯盛山にのぼり、はるかに城を望みながら、互に刺しちがへて悲壯な最期をとげた。これから、諸藩もつぎぐに降り、奥羽地方は全く平いだ。幕府の海軍を指揮してゐた榎本武揚は、軍艦をひきゐて北海道に走り、函館の五稜郭にたてこもつたが、これもほとんどなく降つた。こゝにおいて、全国がことごとくしづまつた。時に明治二年五月であつた。

後、朝廷では、容保がかつて京都を守護して、忠勤をはげんだことを思し召され、その罪をおゆるしになつた上、正三位をお授けになつた。武揚もまもなくゆるさ

れて、後、重く用ひられた。

第四十七 明治天皇

一 明治維新

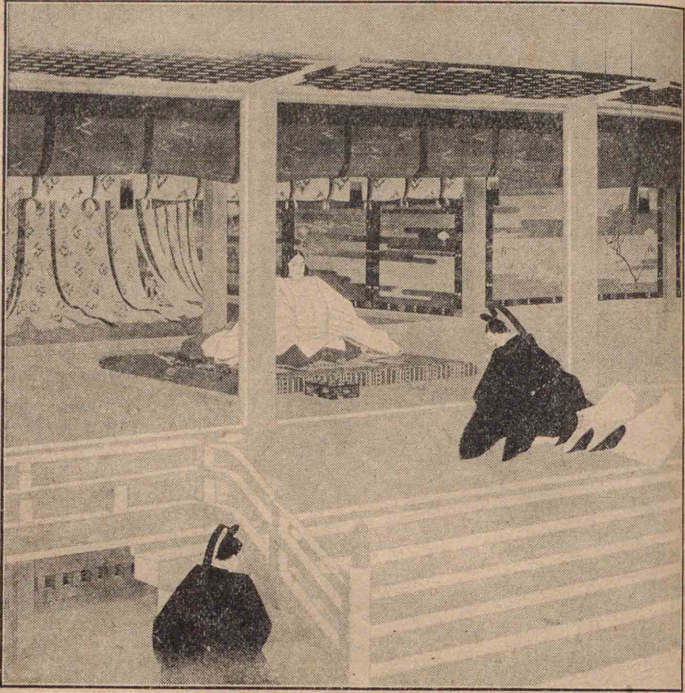
天皇の御幼時

明治天皇は、孝明天皇の皇子にましまし、御生まれつき英明剛毅にわたらせられた。まだ御幼少の時、孝明天皇に従つて、京都御所の日の御門で、藩兵の演習をやらんになつたことがある。百雷の一時に落ちるやうな大砲・小銃の音に、人々はたゞ身ふるひして恐れたが、天皇は御顔の色もおかへにならず、御熱心にごらんになつたといふことである。御位をおつぎになつたの

は、御年十六歳の時であつた。

まもなく、徳川慶喜が大政をお還し申し上げたので、天皇は、神武天皇の御創業の昔にたちかへり、大小いつさいの政治を天皇御み

明治天皇の御踐祚



大政を統べ給ふ

づから統べ給ふことを、天下に仰せ出された。まづ、これまで、攝政・關白・征夷大將軍などの官職をおやめに

新政の御方針を定めるにあら

なり、新しく總裁・議定・參與の三職をお定めになつた。さうして、有栖川宮熾仁親王をはじめ、皇族の方々、三條實美、岩倉具視、西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允らの人々を重く用ひられて、もろくの政治を行はしめられた。天皇は、政治を一新し、萬民を導き、國威を世界にかぶやかさうとの大御心から、まづ政治の根本方針をお立てになつた。明治元年三月、御みづから文武百官をひきゐ、紫宸殿にお出ましになつて、この御方針を天地の神々にお誓ひになり、同時にこれを萬民にお示しになつた。すなはち

一、廣く會議を興し、萬機公論に決すべし。

五箇條の御誓文

都を東京におさだめになる

一、上下心を一にして、盛に經綸を行ふべし。
 一、官武一途庶民に至るまで、各其の志を遂げ、人心を
 して倦まざらしめんことを要す。
 一、舊來の陋習を破り、天地の公道に基づくべし。
 一、智識を世界に求め、大いに皇基を振起すべし。
 どの五箇條であつて、世にこれを五箇條の御誓文と申し上げる。かうして、新政の基はいよいよ定まり、國民は聖恩に感じて、新しい日本の門出を心から喜びあつた。

これよりさき、大久保利通は、人心を一新するため、遷都の必要があることを熱心に唱へた。朝廷でも深

くこの事をお考へになつて、明治元年、江戸を東京とお



東 京 行 幸 の 折 に 農 業 を 行 々 進 行 せ ぬ べ かり

改めになり、天皇はこゝに行幸あらせられた。鳳輦が東海道を進むになると、沿道の國民は、御盛儀を拜し奉り、感涙を流して喜びあつた。かしこくも、天皇はたび

たび御乗物をおとづめになつて、人々が農業にいそしむ有様をごらんあらせられた。

まもなく、天皇はいつたん京都に還幸になり、皇后をお立てになつて、翌二年、再び京都をお出ましになつた。まづ伊勢の神宮に詣でて、したしく御拜になつた後、日を重ねて、東京宮城きやうしやうにおはいりになり、これからながくこゝにおとづまりになつた。

さきに朝廷では、幕府の舊領をお取上げになつたが、大名はなほものとほり、領内を支配しはいしてゐた。木戸孝允は、これをことごとく朝廷にお還し申させようと考へ、大久保利通と共に大いに力をつくした。その結

藩をやめて縣を置くにあら

果、長州・薩摩・肥前・土佐の四藩主が連名して、まつさきにその領地をお還し申し上げたいと願つたので、他の諸藩もつぎ／＼にこれにならつた。朝廷ではこれをお聞きとゞけになり、しばらく舊藩主をして、それ／＼その地を治めしめられたが、明治四年になつて、全く藩を廢して縣を置き、新たに知事を任命し給うた。この時にも、これまでのやうに家柄だけを重んじる習はしをやめて、廣く人材をあげ用ひられた。かうして、もろもろの政治はすべて一途に出ることとなり、明治維新の大業ははじめて成つた。

内外の政治をお整へになる

明治五年には、國中に一人も無學なもののないやう

にどのありがたい思召から、新たに學制が定められ、國民は皆一様に教育を受けることとなつた。また翌六年には、徴兵令が布かれ、國民はすべて兵役に服することとなつた。

かうして、國內の政治がしだいに整ふと共に、一方、外國との關係も大いに改つていつた。さきに、わが國は五箇條の御誓文の御精神に従つて、諸外國との和親をはかる方針を立てたが、やがて、アメリカ合衆國をはじめ、わが國と關係の深くなつた條約國に公使が置かれ、また岩倉具視らは、歐米諸國に使用して、和親をはかり、あはせてその文明を視察した。

朝鮮と國
交をはか
る

これよりさき、わが國は、古くから深い關係のある朝鮮に、特に使を遣はして、維新の政治を告げると共に、改めて親しい交を結ばうとした。ところが、その頃朝鮮は鎖國の方針をとつてゐたので、わが國が歐米諸國と交を開いたことをあなどり、容易にわが國の好意を受けようとしなかつた。そこで西郷隆盛は、みづから朝鮮におもむいて談判し、なほ聞入れない時は、出兵してこれを討たうと主張した。たまく、歐米諸國の視察を終へて歸朝した岩倉具視らは、まづ内治を整へることが急務であることを説いて、強く隆盛らの意見に反對した。ために隆盛らの主張はいれられなかつたの

西南の役

で、隆盛らは官を辭して郷里に歸つた。隆盛は、鹿兒島かごしまに歸り私學校しがくかうを起したが、名望をしたつてこゝに入學する青年が、たいそう多かつた。やがてこれらの人々は、政府のなす所に不平をいだき、明治十年、つひに隆盛をおし立てて兵を擧げ、進んで熊本城くまもとを圍んだ。そこで朝廷は、有栖川宮熾仁親王を征討總督として、隆盛を討たしめられた。官軍は、諸所に奮戦して熊本城を救ひ、つひに隆盛らを鹿兒島の城山しやまに圍んでこれをたふした。世にこれを西南の役といつてある。

後、明治二十二年憲法發布けんぽうはつぷの日、明治天皇は、隆盛が維

新の際につくした功を思し召され、賊名をお除きになつた上、正三位をお贈りになつた。

皇室の御めぐみ

天皇はこの役に、かしくも大阪陸軍病院に行幸あらせられ、したしく傷病兵をおいたはりになり、皇后、皇太后は、御みづから繻帯をおつくりになつて、負傷兵にたまはつたので、皇室の深い御めぐみに感泣しないものはなかつた。



博愛社

博愛社

また佐野常民らは、博愛社をたてて、官軍、賊軍の別なく傷病者の治療につとめた。これが日本赤十字社の起である。

二 憲法發布

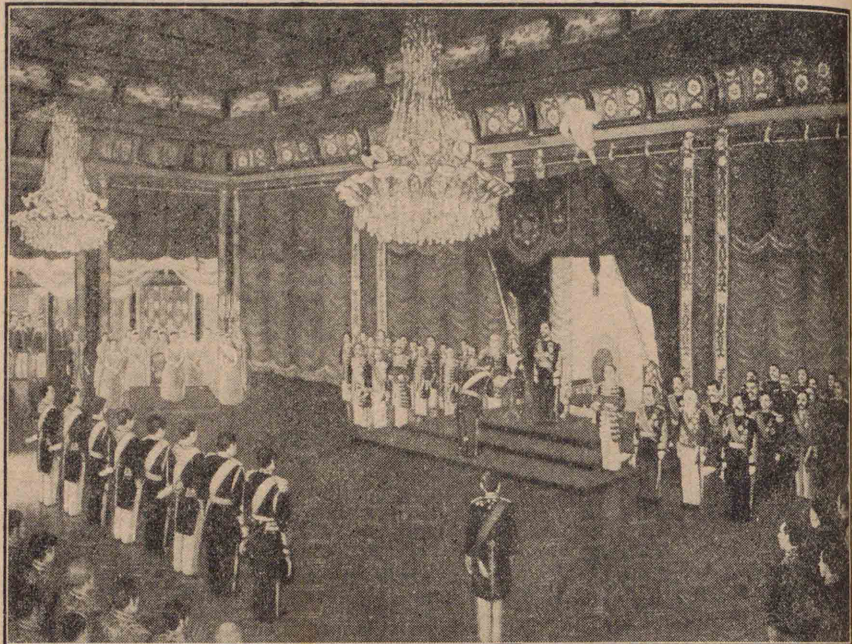
公論採用の道を開きにする

明治天皇は、さきに五箇條の御誓文をお下しになつて、廣く會議を興し、萬機公論に決すべし。と仰せられ、公論採用の新方針をお示しになつた。そこで政府は、地方官會議を東京に開いて、地方の政治を議させ、ついで府縣會を設けて、はじめて民間から議員を選び出させた。一方、國民の政治に對する考も、しだいに向上し、國

會くわいの開設を願ひ出るものが、つきくくにあらはれた。
 明治十四年、天皇は、明治二十三年を期して、國會をお
 開きになる旨を仰せ出された。板垣退助いたがき たいすけ、大隈重信おほい ちかのぶら
 は、それくく政黨せいとうを組織して、國會の開設に對する用意
 をした。

皇室典範
 と大日本
 帝國憲法
 を御制定
 になる

明治十五年、伊藤博文いとう ひろぶみは、天皇の仰を受けて、ヨーロッパにおもむき、各國の憲法を調査して、翌年歸朝し、熱心にその取調とりしらべに當り、わが國體に基づく憲法の起草に取りかゝつた。その後、明治十八年には、新たに内閣ないかくの制度が定められ、ついで市制、町村制が布かれた。やがて明治二十一年に、憲法の草案が出来上つたので、天皇は

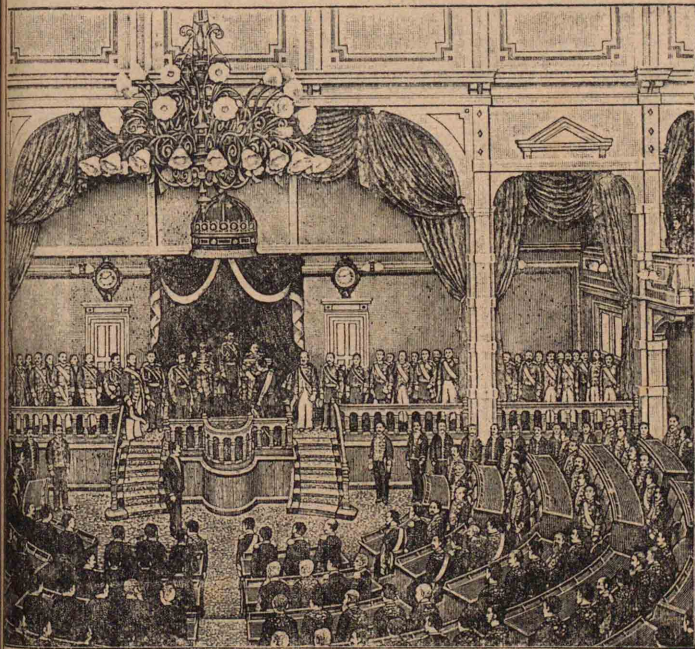


憲法を發布し給ふ

樞密院すうみつゐんの會議に臨御りんごし給ひ、したしく草案の審議しんぎをみそなはし給うた。さうして、翌明治二十二年に至り、皇室典範くわうしつてんぱんと大日本帝國憲法とをお定めになり、紀元節の日きげんせつに、宮中正殿みやのちゆうてんにおいて、憲法發布の式をお舉げになつた。皇室典範は、

皇室に關する根本の法であり、憲法は、天皇がわが國をお統べになる大法である。

天皇は時勢の進運にかんがみ給ひ、皇國の隆昌と臣民の慶福とをお望みになる大御心から、皇祖皇宗の御遺訓に基づいて、御みづからこの大法を御制定になり、國民こ

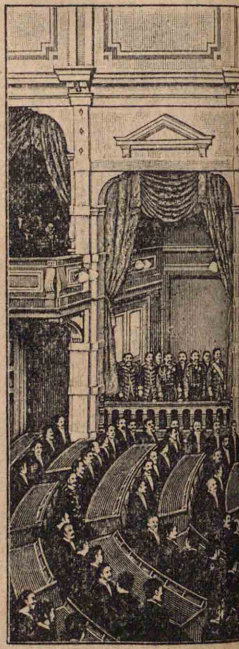


第一回帝國議會開

ぞつて御仁徳をあふぎ奉り、和氣の上下にみちくゝてあるうちに、御發布あらせられた。かやうなことは、外國には全くその例を見ないこと、こゝにも比類のないわが國體の尊さがある。

翌明治二十三年、天皇は、憲法の定に基づいて、帝國議會を東京に召集せられ、その開院式にしたしく御臨幸あらせられた。その後、議會は毎年召集せられ、國運は年と共に進展した。

帝國議會
をお開き
になる



院式

朝鮮事變

三 明治二十七八年戦役

明治九年、わが國は朝鮮と修好條約を結び、もつばら朝鮮が健全に發達することを望んだ。ところが朝鮮には、かねてから黨派の争がはげしく、その上清國が朝鮮を屬國のやうに取扱つて、その内政に干涉したので、政治はとかく亂れがちであつた。明治十七年には、京城にとゞまつてゐた清國の兵が、朝鮮の兵と共にわが公使館におし寄せ、火を放つて官民を殺傷した。そこでわが政府は、朝鮮にきびしく談判して謝罪せしめ、更に伊藤博文を清國に遣はして、李鴻章と天津で會見さ

清國と戦
を開く

せ、兩國とも朝鮮に兵をとゞめることをやめ、必要の場合には、互に通知してから、出兵すべきことを約束した。これを天津條約といつてゐる。

しかし清國は、その後もなほ朝鮮を屬國のやうに取扱ひ、ひそかに自分の國にたよらうとするものを助けたので、その黨が勢力を得、政治はいよく亂れた。これがため、人民は苦しみのあまり、明治二十七年に至つて、つひに亂を起した。すると清國は、屬國の難を救ふと稱して、たゞちに兵を朝鮮に送り、これをわが國に通知して來た。そこでわが國もまた、公使館と居留民を保護するために兵を出し、なほ清國にすゝめて、共に力



大本營で軍務をならぬ

には、豊島沖でわが艦隊を砲撃した。わが艦隊は、たち應戦してこれをうち破り、ついで陸軍も清國兵と

成歡に戦つて大勝した。このにおいて天皇は、宣戦の詔をお下しになり、やがて大本營を廣島に進めて、したしく諸軍をお統べになつた。

皇軍の士氣はいやが上にも振るひたち、陸軍は平壤をおとし、海軍は黄海に敵の艦隊をうち破り、しかもわが一艦をも失ふことなくして、敵艦をほとんど全滅に至らしめた。

その後も皇軍は、陸に海に連戦連勝し、翌明治二十八年に入ると、陸軍大將大山巖は、海軍中將伊東祐亨と力を合はせて、敵の海軍根據地威海衛を攻落した。敵將丁汝昌は、力つきて降服し、責任を感じて自殺した。祐

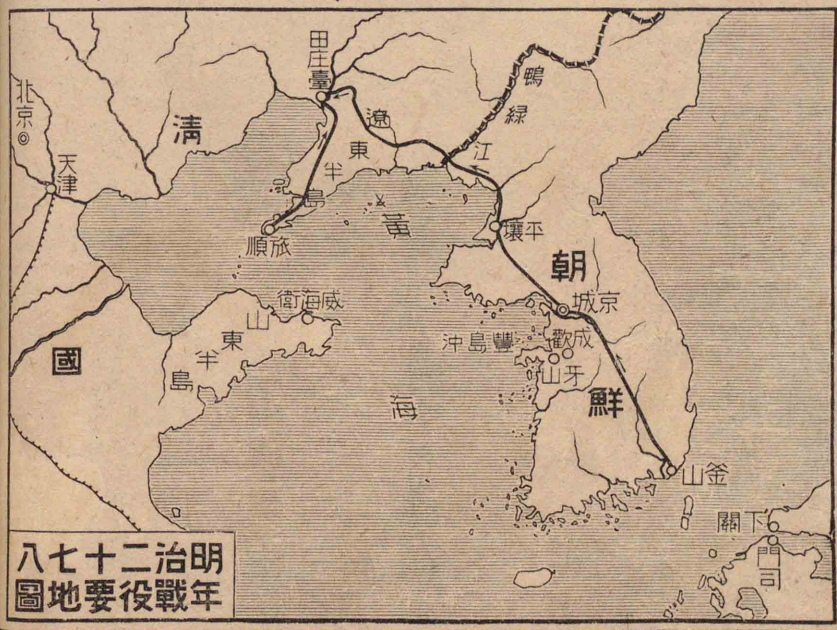
平壤や黄
海で勝つ

威海衛を
占領する

清國が和を請ふ

亨は、敵ながらもあつばれな汝昌の志に同情し、特に汽船を與へて、ねんごろにその樞を送らせた。

やがて、わが軍は、破竹の勢を以て、遼東半島を占領し、まさに清國の首都北京にせまらうとした。清國は、大いに驚き、李鴻章をわが國に遣はして和を請うた。わが政府は、内閣總理



明治二十七八年戰役要地地圖

下關條約

大臣伊藤博文、外務大臣陸奥宗光をして、これと下關で談判させ、清國をして、朝鮮の内政にいつさい干涉しないこと、遼東半島と臺灣、澎湖島とをわが國に讓ること、償金およそ三億圓を出すことなどを約束させて和を結んだ。明治二十八年四月のこと、これを下關條約といつてゐる。その後まもなく、朝鮮は國號を韓と改めた。

大勝の理由

この戦役は、國運をかけた大戦争であつたが、平和の回復するまで、天皇は久しく廣島の大本營においてになつて、狭い御室で日夜萬機を御親裁になつた。かたじけなくも、出征軍人の勞苦をしのばせられ、嚴冬にも

三國干涉

ストーブさへお用ひにならなかつた。また出征の將兵は、家を忘れ身をすてて大君のために戦ひ、國民はこぞつてこれを援け、上下心を一つにして外敵に當つたので、つひにこの大勝利を博したのであつた。

ところが、かねてから滿洲に南下しようとの野心を持つてあつたロシアは、ドイツフランスの二國を誘つてわが國にせまり、日本が遼東半島を領有することは、東洋の平和に害があると稱して、これを清國に還すやうすゝめて來た。わが政府は、内外の情勢を深く考へてこのすゝめをいれ、遼東半島を清國に還した。この時、明治天皇は、かしくも詔をお下しになつて、東洋平和

臺灣を平定する

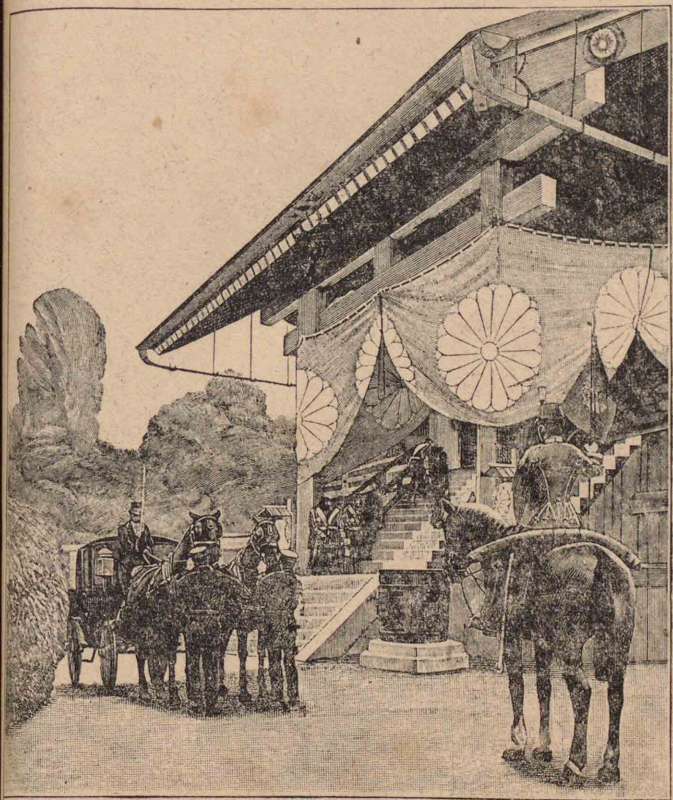


能久親王が臺北に御入城なる

のため、三國の勸告をいれ給うたことをお宣べになり、あはせて、國民の輕舉をお戒めになつた。國民は詔を拜して涙にむせび、今後いかなる困難にもうち克つて、一日も早く大御心を安んじ奉らうと、堅く心に誓つた。

臺灣はすでにわが領土となつたが、島内にはなほ

命に從はないものがあつたので、北白川宮能久親王は、
近衛師團の兵をひきゐてこれをお討ちになつた。親



靖國神社に不幸病にかかりになつたが、なほ轎に乗つて軍の指揮をつづけ給うたので、御病は日にく重

り、つひにおなくなりになつた。ほどなく全島は平
だが、これは全く親王の御功績によるものである。臺
北にある臺灣神社には、親王をおまつり申し上げてあ
る。

靖國神社

明治二十八年十二月に、この戦役に戦死した人々を、
東京九段の靖國神社に合祀せられ、かしくも天皇は
こゝに行幸し給うて、したしく祭儀にお臨みになつた。
靖國神社は、明治の初に建てられ、維新前後から今日に
至るまで、國家の事變に身命をさげた忠勇な臣民を
まつつてある社である。

條約の改正をはかる

四 條約改正

安政年間に幕府が諸外國にすゝめられて結んだ條約は、わが國の面目や利益をそこなふ箇條が少くなかつた。中にも、わが國內に居留する外國人の裁判は、わが裁判官によらないで、その國の領事がこれを行ひ、また輸入品に對しても、わが國が自由に關稅を課したり、稅率をきめたりすることが出來ないやうな定であつた。

わが政府は、維新以來たび／＼諸外國と談判して、條約の改正につとめ、國民もまた早くその實現することを望んだが、これを各國に同意させることは容易でなかつた。その後、わが國では憲法を布き、議會を開いて、法律制度などをつぎ／＼に整へ、國力が大いに充實したので、外務大臣陸奥宗光は、まづイギリスと談判して、條約改正に同意させた。これは、明治二十七八年戰役が、まさにはじまらうとする時であつたが、やがてこの戰役によつて、わが國威が大いにあがつたので、他の諸國も皆つゞいて改正に同意した。

この改正條約は、明治三十二年から實施され、外國人もすべてわが裁判に服することとなり、更に明治四十四年になつて、輸入品に對する稅も、わが國で自由にき

改正條約が行はれる

めるやうになつたので、わが國の長い間の希望は、こゝにはじめて達せられた。

五 明治三十七七八年戦役

北清事變
が起る

さきにわが國にすゝめて、清國に遼東半島を還させ、たロシヤは、その後、清國にせまつて旅順、大連などを租借し、ドイツ、イギリス、フランスの諸國もこれにならつて、膠州灣、威海衛、廣州灣などをそれぞれ租借するに至つた。そこで清國人の中には、外國人をきらふものも多くなり、つひに義和團となへる暴徒が起つて、キリスト教の會堂を焼き、宣教師などを殺した。明治三十

ロシヤと
國交を絶つ

日英同
盟

三年には、官兵までもこれに加つて、北京にある各國の公使館を圍んだ。よつて、わが國をはじめ各國の軍は、聯合して北京に攻入つてこれを救つた。そこで清國は、暴徒を罰し、償金を列國に出して謝罪した。これを北清事變といつてゐる。この事變において、わが軍の働きは特に目ざましく、將兵が勇敢で規律の正しいこととは、はるかに列國の軍隊をしのいだ。

この事變が起ると、ロシヤは、しきりに滿洲に出兵して各地を占領し、やがて韓國にも手をのばすに至つた。わが國は、清韓兩國の領土の安全をはかり、東洋の平和を保つために、明治三十五年、イギリスと同盟を結び、ま

わが軍の
進撃

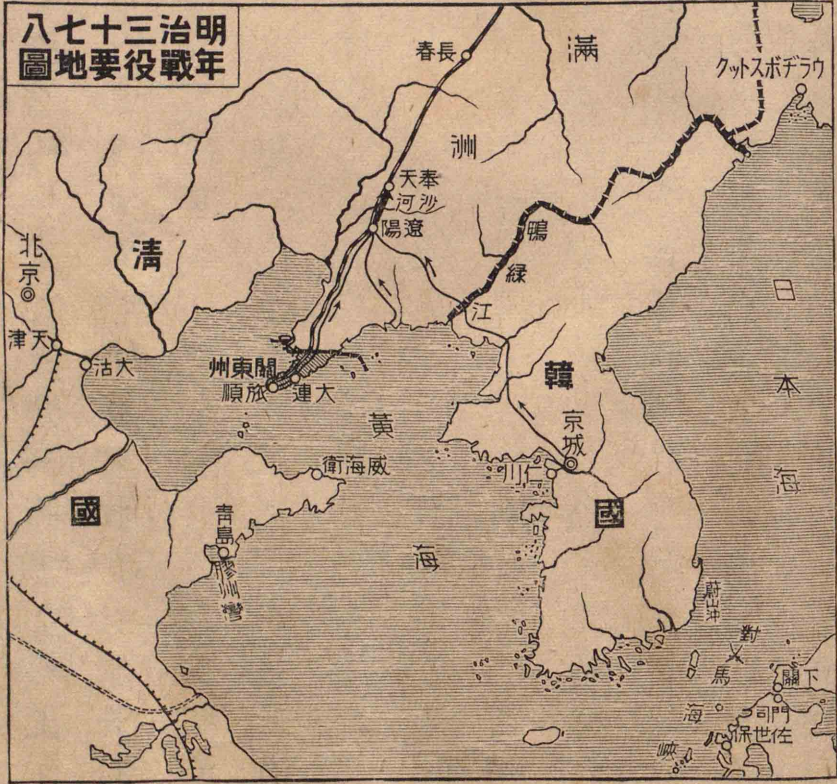
たしばく、ロシアと談判して、兵をひきあげさせようとした。しかし、ロシアは少しも誠意を示さず、ますます旅順の防備を堅くし、海陸の兵力を増した。明治三十七年二月、わが國はやむを得ず、ロシアと國交を絶つた。

わが艦隊は、たゞちに仁川沖及び旅順口外で敵艦隊を撃破し、陸軍は、ロシア兵を韓國から追ひ、進んで滿洲の野に轉戦して、北へくと進撃した。天皇は、陸軍大將大山巖を總司令官として、滿洲の諸軍を統べさせ給うた。敵の總司令官クロバトキンは、わが軍を遼陽で防いだ。が、力及ばず、奉天に退却して、本國からの援兵を

海軍の活
動

合はせ、再び大軍をひきあて南下した。わが軍はこれを沙河に迎へ撃ち、激戦數日にして、大いに敵軍をうち破つた。一方海軍は、しばしば旅順を攻撃して、敵艦隊に少からぬ損害を

明治三十七年
戰役要地圖



與へ、またその出動をさへぎるため、決死隊を募つて、三度港口の閉塞をこゝろみ、海軍中佐廣瀬武夫ら諸勇士の働きによつて、ほぼ目的を達した。ところが、敵艦隊はすきを見て港外に逃出し、ウラチボストツクへ走らうとしたので、わが艦隊はたゞちに追撃して、黄海で戦ひ、大いにこれを破つた。つゞいてわが別艦隊が、ウラチボストツク艦隊を蔚山沖にうち破つたので、これから海上には、一隻の敵艦をも見ないやうになつた。

また陸軍大將乃木希典は、軍をひきゐて旅順にせまり、海軍と共同してその要塞を攻撃した。旅順の要塞は、敵が難攻不落を世界にほこる堅城で、しかも敵將ステツセルは、固くこれを守り、あくまで抵抗をつづけたので、容易にこれをおとし入れることが出来なかつた。わが忠勇な將兵は、身命をすてて戦ひ、皇恩にむくい奉るのはこの時ぞと、いくたびか突撃をくりかへして、つひに二百三高地を占領した。こゝに至つて、港内の敵艦をうち沈め、つゞいて他の砲臺をも占領したので、さすがのステツセルも、力つきて翌明治三十八年一月、城を開いて降服した。天皇は、ステツセルが、敵ながらも勇敢に戦ひ、自國のためにつくしたことを思し召され、て、武人の面目を保たしめよと仰せられ、城中の將校には、特に帶劔を許し、本國へ歸ることをもお許しになつ

旅順の開城

第四十七 明治天皇

奉天の大戦

た。

旅順をおとしいれた乃木軍は、たゞちに北上して、わが主力軍に加り、總軍およそ四十萬、一舉に奉天の敵を破らうと進撃した。敵將クロバトキンも、この度こそ連敗の面目をとりかへさうと、五十餘萬の大軍を



旅順の開城



大江山總司令官の奉天入城

みうちにして、大いに敵を破り、つひに三月十日、奉天を占領し、敵兵二萬餘を捕虜とした。

ひきあて、われにせまつて来た。わが將兵の意氣は天をつくばかりで、三方からはさ

日本海の
海戦

これよりさき、ロシアはわが海軍に對抗するため、その海軍の全力を擧げて、はるく東洋に廻航させたが、五月二十七日、待ちに待った敵の大艦隊は、わが對馬海峡にあらはれた。わが聯合艦隊司令長官海軍大將東郷平八郎は、四十餘隻の艦隊をひきゐてこれを迎へ撃ち、旗艦三笠に、



三笠艦の上の東郷司令長官

陸軍記
念日

海軍記
念日

「皇國の興廢此の一戦にあり、各員一層奮勵努力せよ。」との信號を高くかゝげて、全軍を激勵した。將兵の意氣は大いにあがり、互にはげましあつて、敵を全滅させることを誓つた。折から風は強く、浪は高かつたが、わが軍は奮戦力闘し、つひに敵艦十九隻を撃沈し、五隻を捕らへ、司令長官を虜にし、世界の海戦に例のない大勝利を得た。ついでわが別軍は樺太に向かひ、たゞちにこの地を占領した。

奉天の戦と日本海の海戦は、共にこの戦役の勝敗を決したもので、ながくこれを記念するために、三月十日を陸軍記念日、五月二十七日を海軍記念日としてゐる。

ロシヤと
講和する

かうして、日露の大戦もはや大勢が定まつたので、アメリカ合衆國の大統領ルーズベルトは、わが國とロシヤとの間に立つて、講和をすゝめた。わが國は、これに應じて、外務大臣小村壽太郎らを全權委員として遣はし、ロシヤの全權委員と、アメリカ合衆國のポーツマスで談判させたが、三十八年九月に講和條約が成立した。この條約によつて、ロシヤは樺太の南半と長春新京旅順間の鐵道及び關東州の租借權をわが國に譲り、また、わが國が韓國を保護することに干渉しないことを約束した。

大勝を得
た理由

ポーツ
マス條
約

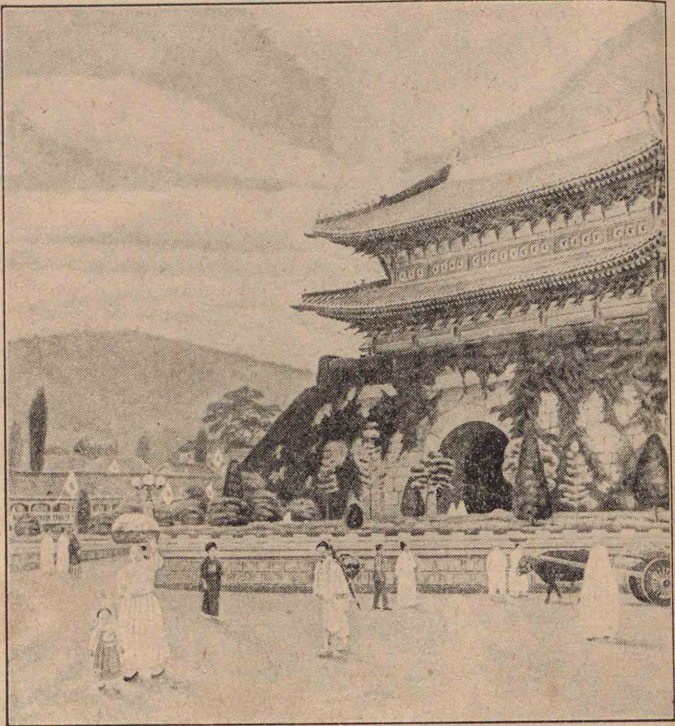
戦が終ると、海陸の諸軍は、つぎつぎに凱旋した。天

皇は伊勢に行幸し給ひ、したしく神宮に平和の回復をお告げになつた。この戦において、わが國は舉國一致、世界の一大強國を相手として連戦連勝し、大いに國威を世界にかゝやかした。これは全く、天皇の御稜威によるのであつて、御めぐみによつて、教育がひろく國民の間にゆきわたり、盡忠奉公の精神が深く養はれてゐたためである。

かくてわが國は、一躍世界の一大強國たることを諸外國に認めさせるに至つたが、同時に、これまで歐米諸國に壓迫されてゐた、東亞諸國の自覺をうながすことも多かつたのである。

内鮮一體
となる

明治三十七八年戦役の後、わが國は韓國に對する他國の干渉をいつさい除いて、これを保護し、その内政を改めさせた。しかし、長い間つゞいた政治上の弊害は、なかく取去ることが出來ず、韓國の人民は、なほ不安な生活を送らねばならない有様であつた。それで韓國の國利民福を進め、東洋の平和を保つためには、どうしても、韓國が日本と一體にならなければならぬ。ところが明らかに、韓民の中にはこれを願ふものが少くなかつた。韓國皇帝もまた深くこれを望まれ、いつさいの統治權を天皇にお譲りになりたい旨を申し出られた。天皇は、これをお聽入れになつて、明治四十三年八月、特に詔をお



内 鮮 一 體

年八月、特に詔をお下しになり、やがて韓國を改めて朝鮮となへ、新たに總督を置いて、政務をつかさどらしめ給うた。こゝにおいて、古くからわが國と親密な關係をつづけて來た半島の人民は、ひとしく皇國臣民となり、東洋平和の基はいよく堅くなつていつた。

六 明治天皇の崩御

御病にか
からせ給
ふ



明治天皇

維新以來
わが國運は
日に月に盛
大となり、國
民あげてこ
の大御代を
ことほぎ奉
つてある折

から、思ひがけなくも、天皇は、明治四十五年七月、御病に

おかゝりになつた。このことがひとたび發表せられ
ると、國民の驚きはひとほりでなく、上下こぞつて、ひ
たすら御平癒をお祈り申し上げた。宮城の正門外に
は、御病状を案じ奉つて、日に／＼集つて來るものが幾
千とも知れぬ程で、地上にひざまづいて宮城を拜し、夜
を通してお祈りするものが少くなかつた。しかし、天
皇の御病は日一日と重らせられ、つひに七月三十日、御
年六十一歳で崩御あらせられた。國民の悲しみは、た
とへやうもなく、世界の國々も天皇の御盛徳をたゞへ、
崩御をお惜しみ申し上げた。

明治天皇は、御年少の御身で、國事多難の際、御位をお

御盛徳の
數々



国内勸業博覧會行幸啓

つぎになり、萬機をお統べに
なること四十六年に及んだ。
まづ維新の大業を

開き給うて、内には憲法を布き、法制を整へ、交通・産業をはじめ、もろくの事業を御奨励になり、更に軍人勅諭や教育に關する勅語を下して、國民のふむべき道をお示しになつた。また外には、大いにわが國威をかゝり、諸外國との交際をますます親密にし、わが國を世界の一大強國となし給うた。まことに天皇の御治世におけるわが國運の發展は、諸外國の歴史にはためしのないことであつた。

天皇は、常に御みづから節約を守り給ひ、常の御座所などは、きはめて質素な御造で、御敷皮おんしきかわの破れなど、つくろはせてお用ひになつたとさへいふことである。また朝夕萬民の上に大御心をかけさせられ、

照るにつけくもるにつけて思ふかな
わが民草のうへはいかにと

とおよみになつてゐる。國民を思ひやり給へる思召のほど、まことにかしこくも、かたじけないきはみである。

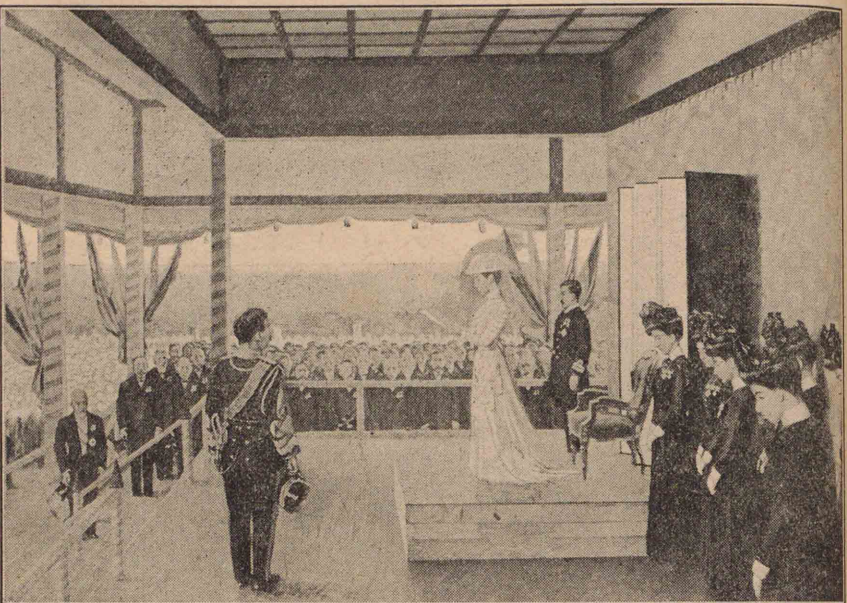
御大葬

天皇が崩御になると、たゞちに、第百二十三代大正天皇が御位をおつぎになつて、年號を大正とお改めになつた。この年の九月、明治天皇御大葬の御儀をお舉げになり、伏見桃山陵みのもちやまのみささぎにをさめまゐらせ給うた。

昭憲皇太后の崩御

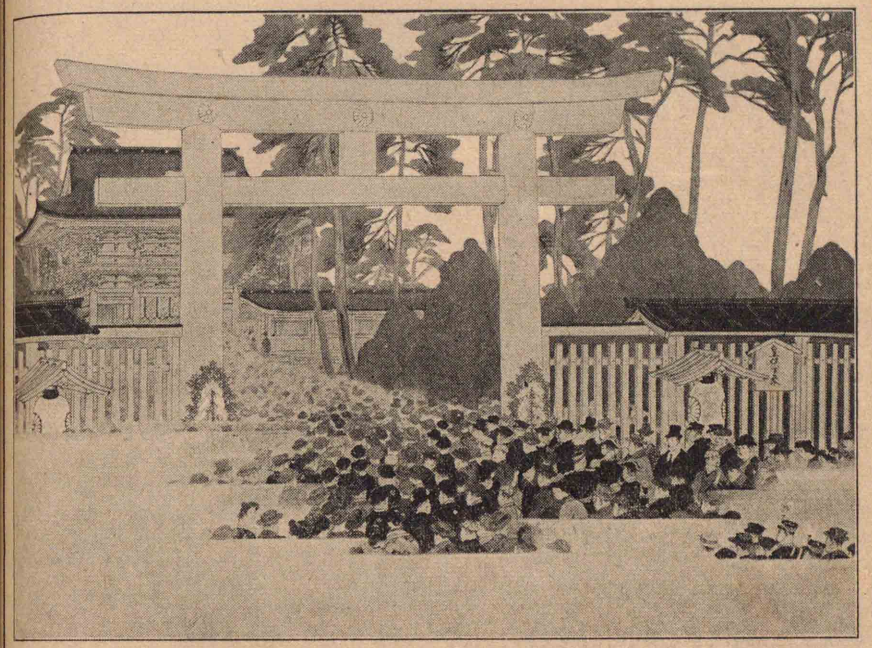
明治天皇を哀慕あはほし奉る涙がまだ乾かわかないうちに、昭憲皇太后けんくわうたいこうが、また御病のため、大正三年四月に崩御になり、やがて伏見桃山東陵ふしみのもちやまのひがしのみささぎにをさめまゐらせ給ふこととなつた。皇太后は、明治の初、皇后にお立ちになつてか

明治神宮と明治節



赤十字社總會行啓

ら、ひたすら内において明治天皇をお助けになつて、御功績が高かつた。常に御めぐみの御心が深く、たび／＼學校や病院などに行啓ぎやうけいあらせられて、學藝をおすゝめになり、慈善事業をおほげましになつた。
東京代々木よ、ぎの明治神宮は、明治天皇と昭憲皇



明 治 神 宮

太后をおまつり申し上げたお社である。國民はながく御二方の御仁徳をしたひ奉つて、神宮に御陵に参拜するものが、いつも絶えることがない。今上天皇は、昭和二年、明治天皇の御降誕あらせられた十一月三日を、明治節とお定め

即位の禮をお擧げになる

になり、毎年お祝ひ申し上げて、どこしへに明治天皇の御盛徳をあふぎ奉ることとし給うた。

第四十八 大正天皇 たいしやう



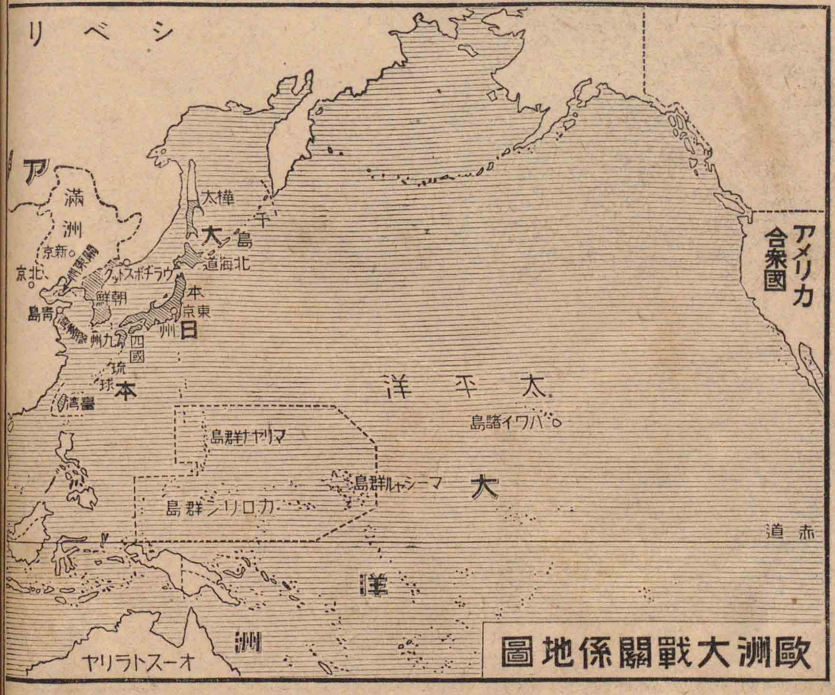
大正天皇は、明治天皇の皇子にましまし、明治十二年に御降誕、御年十一歳で、皇太子にお立ちになった。明治天皇

の崩御と共に、たゞちに踐祚し給ひ、その後明治天皇及び昭憲皇太后の諒闇が終つて、大正四年十一月はじめて皇室典範の定によつて、即位の禮を京都の皇宮でお舉げになつた。

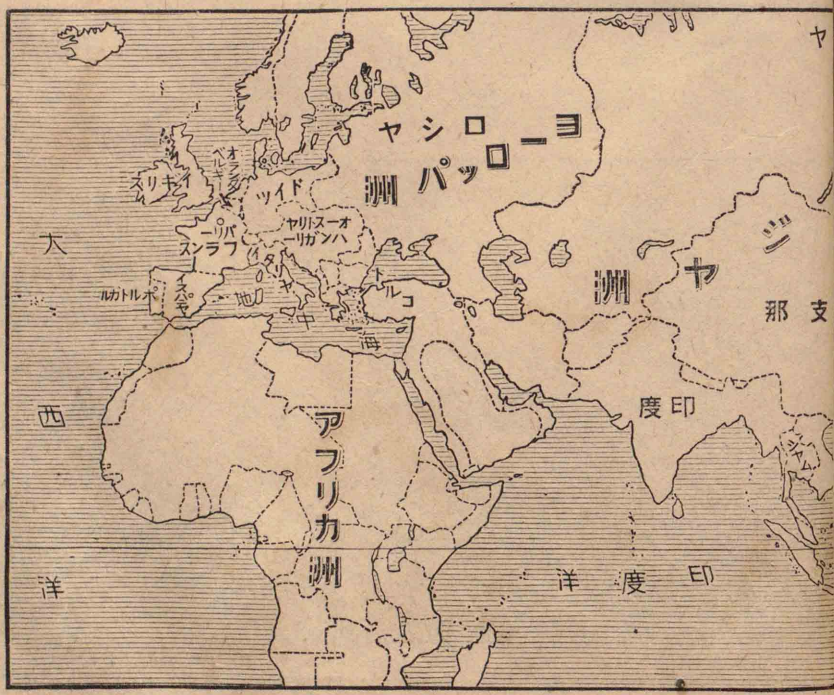
これよりさき、大正三年七月、ヨーロッパ

歐洲に戦亂が起る

に戦亂が起つた。ドイツ、オーストリア、ハンガリーの同盟軍に對し、ロシア、イギリス、フランスの諸國は、聯合軍を組織して、これに對抗したが、後にはイタリヤ、アメリカ合衆國なども聯合軍側に參加し、つひに全世界にわたる大戦争と



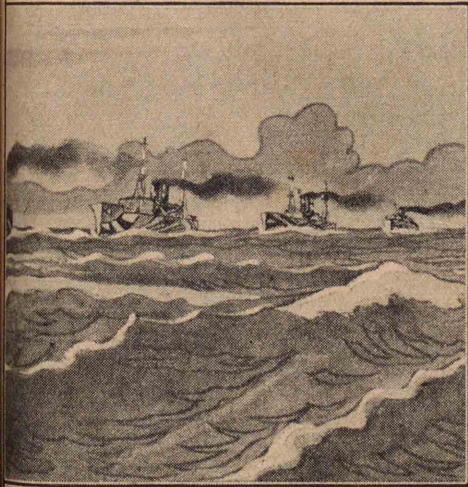
歐大洲戰關係地圖



戦争に加
る

なつた。

この戦亂が起ると、ドイツは、膠州灣に戦備を整へ、その艦艇が東洋の海上に出没するので、わが國は東洋の平和を保つため、また日英同盟の好をもあはせ考へて、大正三年八月、ドイツと國交を絶つた。海軍はたち
に膠州灣を封鎖し、陸軍は後
方から青島を攻撃して、同年
十一月、これをおとし入れた。
またわが艦隊の一部は、南洋
に出動して、ドイツ領のマー
シャル・マリヤナ・カロリン等

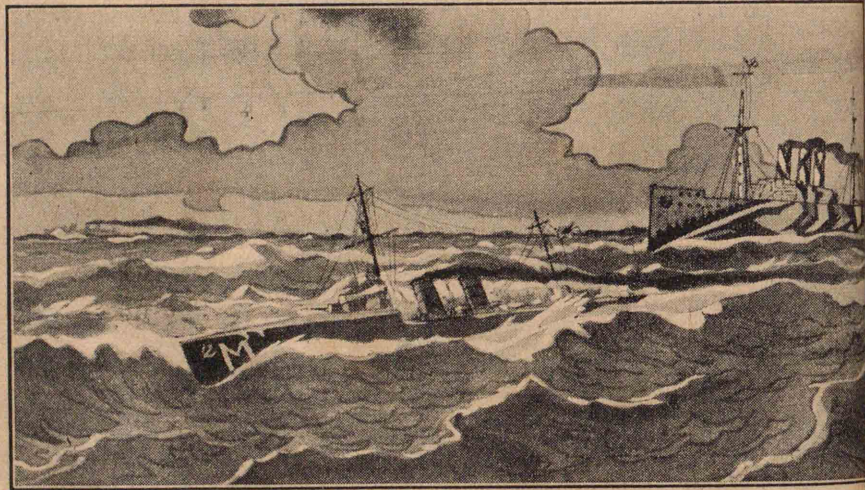


地 中 海 に

印度洋や
地中海に
出動する

の諸群島を占領した。

ところが、ドイツの艦艇は、
なほ印度洋や地中海にあら
はれ、各國の商船をうち沈め、
わが國の商船にも損害を與
へたので、わが艦隊は遠くこ
の方面にも出動して警戒護
衛に當り、さまざまの困難を
しのいで、勇敢な働きをした。
この戦は五年の長い間つ
づいたが、大正七年、ドイツは



活 躍 す る 艦 艇 が

平和條約
を結ぶ

つひに和を請うた。各國の全權委員は、フランスのパ
リ―に集つて平和會議を開くことになり、五大國の一
たるわが國は、西園寺公望さいおんじこうもちらを全權委員としてこの會
議に送つた。

翌年六月、平和條約が成立し、わが國はドイツ領であ
つた南洋群島中、赤道以北を統治することとなつた。
またこの條約によつて、各國は國際聯盟こくさいれんめいをつくり、以後
互に力を合はせて、世界平和をはかることを約束した。

ワシントン
會議

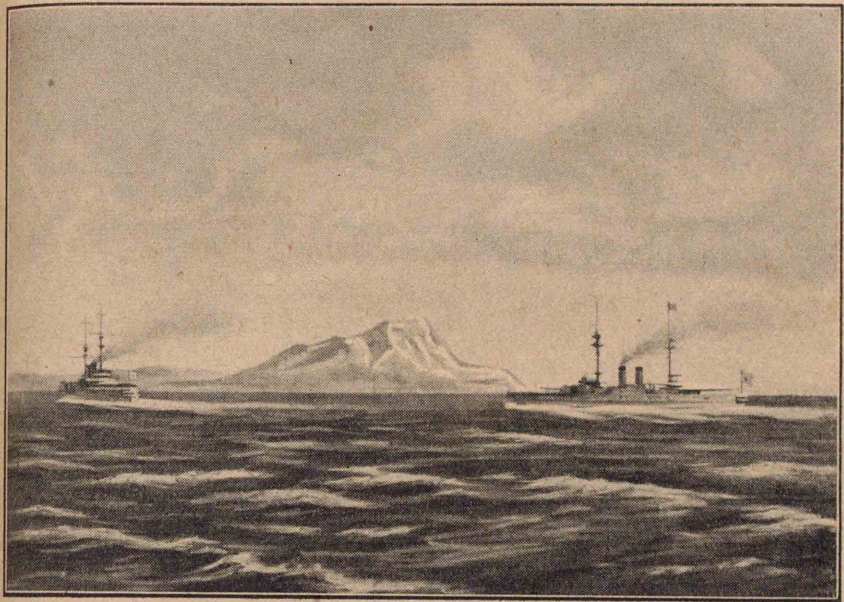
大正十年、アメリカ合衆國の發起ほっさで、世界のおもな國
國の代表がワシントンに集つて、軍備を制限する會議
を開いた。わが國はこれに参加し、海軍大臣かどうともさぶ加藤友三

皇太子が
歐洲にお
めぐりに
なる
攝政を置
かせられ
る

郎らうらの使節を遣はして、イギリス、アメリカ合衆國、フラ
ンス、イタリアの諸國と共に、海軍の軍備を制限するこ
とを定めた。また太平洋の問題について、イギリス、ア
メリカ合衆國、フランスと共に新たに條約を結び、この
方面にある各國領の島々に問題が起つた時は、共同し
てこれを決定することにした。さうして、久しくつゞ
いて來た日英同盟は、こゝに終了することとなつた。
大正十年三月、皇太子裕仁親王ひろひとは、はるく歐洲の各
國をおめぐりになつて、大戦後の有様を御視察になり、
同年九月、還啓くわんけいあらせられた。

この頃、天皇は、御病のため、おそれ多くも大政を御親

天皇の崩御



裁なさることが、御困難
であらせられたので、皇
太子は、大正十年十一月、
皇室典範の規定により、
太子せつしやう攝政として内外の政務
をおとりになることと
御なつた。

大正十五年十二月、天
皇は、御病がいよく、重
らせ給ひ、國民こぞつて
御平癒をお祈り申し上

天皇の御盛徳

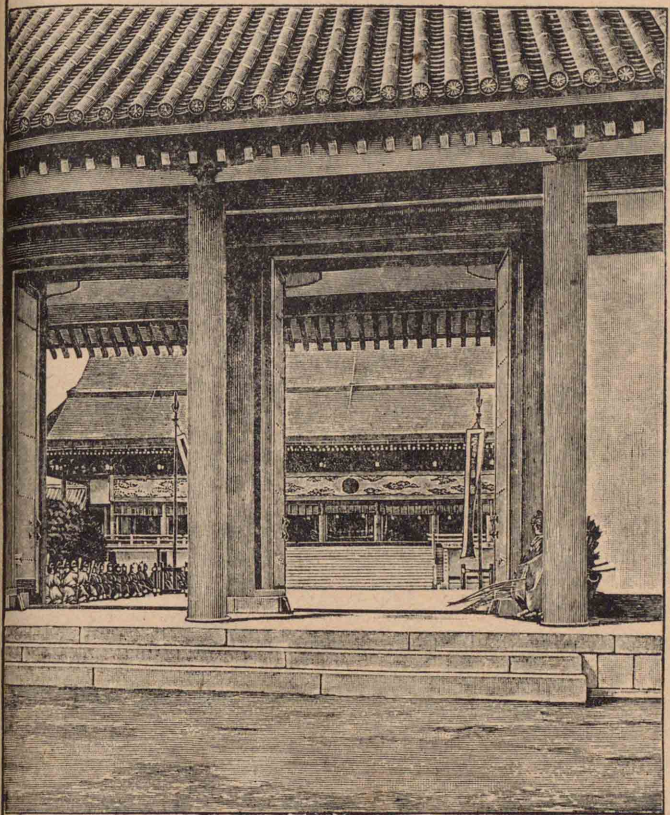
げた熱誠もそのかひなく、同月二十五日に、崩御し給う
た。

御在位十五年の間、天皇は、明治天皇の御遺業を受け
つぎ給ひ、日夜内外の政務に大御心をかけ給うた。天
皇の御治世の間に、わが國は政治學問産業等がいちじ
るしく進歩し、國力は年と共に充實した。また、外には
五大國の一として、世界平和のため常に重要な使命を
はたして、國威をかゞやかした。天皇の御盛徳と御鴻
業は、國民はもとより、世界の國々のあふぎ奉るところ
である。

第四十九

昭和の大御代

天長節

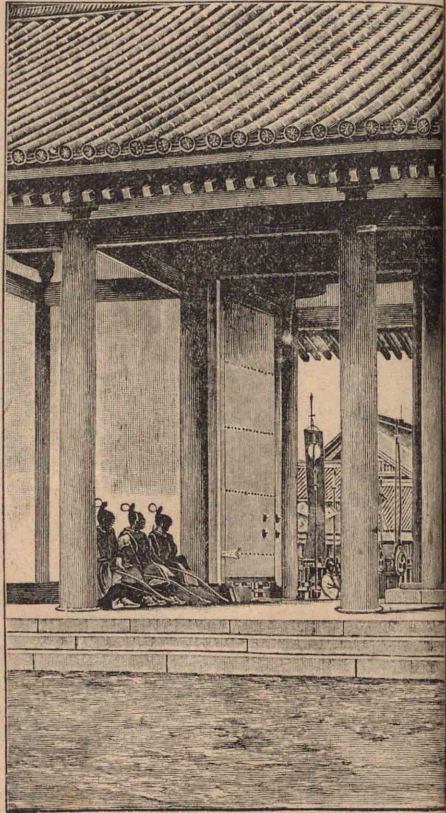


即位の禮を擧

今上天皇は、大正天皇の第一皇子にましまし、明治三十四年四月二十九日に、御降誕あらせられた。御年十六歳の時、皇太子にお

踐祚し給ふ

御大葬の御儀を擧げ給ふ



給い立ち

給い立ちになり、ついで内外多事の折に、攝政の御重任をおはたしになった。

大正天皇が

崩御になると、天皇はたゞちに踐祚し給ひ、年號を昭和とお改めになり、やがて文武百官をお召しになつて、朝見の御儀を行はせられた。つゞいて昭和二年二月には、大正天皇の御大葬の御儀をお擧げになつて、多摩陵にをさめまゐらせ給うた。

即位の禮
を擧げ給
ふ

大正天皇の諒闇があげると、昭和三年十一月、即位の禮を京都の皇宮でお擧げになつた。天皇は、まづ賢所大前おほまへの御儀を行はせられて、皇祖天照大神に御即位の由を告げ給ひ、ついで紫宸殿の高御座たかみくらにのぼり給うて、ひろくこれを臣民にお宣べになつた。この時、國民は全國いつせいに萬歳を唱へて、お祝ひ申し上げた。天皇はつゞいて大嘗祭たいじやうさいを行はせられ、皇祖天照大神をはじめ、天地の神々にしたしく神饌かみせんを供へて、夜もすがらおまつりになつた。かうして、限りなく尊い御盛儀はめでたく終つた。

満洲事變

これよりさき、支那では清がほろびて、共和國きやうわこくとなり、

國號を中華民國ちゆうくわみんこくと改めたが、その後も國內がとかく亂れがちであつた。わが國は、常に隣邦りんぱうの好を重んじ、互に手をたづさへて、東洋の平和をうち立てることにつとめた。しかも支那は、ことごとくにわが國の誠意を疑ひ、はてはわが居留民に危害を加へ、滿洲におけるわが權益までもおびやかすやうになつた。わが國は、たびたび支那の反省をうながしたが、その勝手なふるまひは日ましにつのり、昭和六年九月、つひに支那軍は、南滿洲鐵道を爆破ばくはするに至つたので、わが國は、やむなく兵を出して、滿洲の各地から支那の軍隊を追退けた。これを滿洲事變といつてゐる。

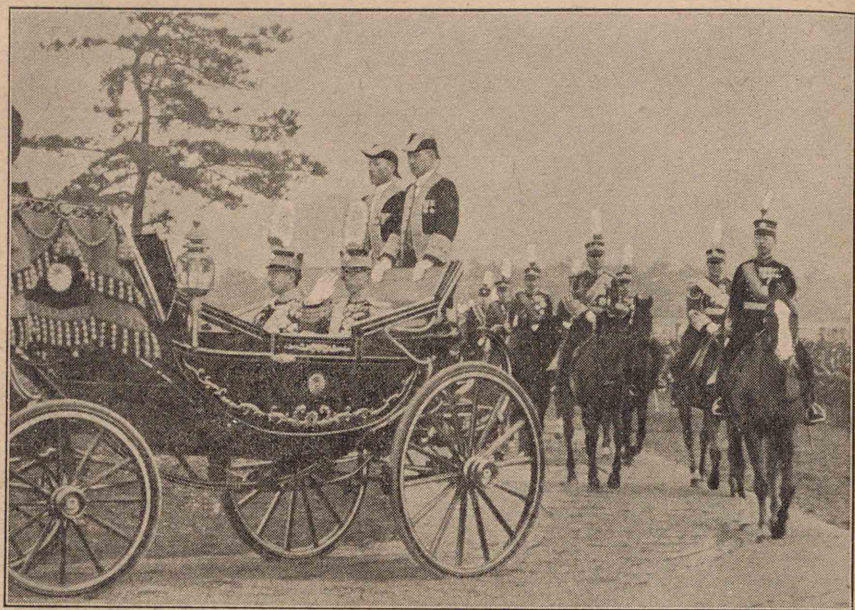
満洲國の
獨立を承
認する

長い間、悪政の下に苦しんでゐた満洲の住民は、これを機會に獨立運動を起し、昭和七年三月、新たに國を建てて満洲國となへ、溥儀執政ふぎしうせいを戴くこととなつた。そこで、わが國は、同年九月、世界の國々にさきだつて満洲國の獨立を承認し、同時に、日滿議定書にちまんぎていしょをとりかはして、日滿兩國は共同して國防に當り、東洋の平和につくさうと固く約束した。

國際聯盟
を離脱す
る

ところが、國際聯盟は、わが公明な精神と正當な行爲を認めようとしなかつたので、昭和八年三月、わが國は斷然聯盟を脱退することになつた。この時、天皇は詔をお下しになつて、今こそ國を擧げて振るひたつべき

満洲國と
の親善



満洲國皇帝の御來朝

時であると、國民をおはげましになり、更に、わが國の進むべき道をお諭しになつた。國民はつつしんで詔を拜し奉り、諸外國との親善をはかると共に、東洋永遠の平和のためには、あらゆる困難にうち克つて進むべきことを固く誓つた。その後、満洲國の諸制

度は、日に月に備はり、昭和九年三月、溥儀執政は、國民に推されて皇帝の位に即かれ、こゝに滿洲帝國が成立した。秩父宮雍仁親王は、天皇の御名代として滿洲國にお渡りになり、したしくお祝ひの言葉をおのべになつた。翌年、滿洲國皇帝も御答禮のためわが國をお訪ねになり、兩國の親善はいよゝゝ深まつていつた。

皇太子の御誕生

昭和八年十二月二十三日、皇太子繼宮明仁親王がお生まれになつた。國民は、久しく皇太子の御誕生をお待ち申し上げてゐたので、その喜びはひととほりではなく、奉祝の聲は日本國中にみなぎつた。

軍備制限會議から

これよりさき、昭和五年、イギリスの發起で、わが國及

脱退する

びイギリス、アメリカ合衆國、フランス、イタリヤの五大國は、再び海軍の軍備について、ロンドンで會議を開き、いつそ軍備を制限することを約束した。しかし、元來ワシントン會議以來の軍備制限には、一面に、わが國の發展をおさへようとする歐米諸國の意圖が含まれてゐたのである。しかもわが國は、世界平和のために、しのでこれを認めたのであるが、その後、世界情勢の變轉に伴ひ、國防上たうていしのび難いものになつたので、わが國は、昭和九年、條約の廢棄をアメリカ合衆國に通告した。そこで、翌昭和十年、各國の代表は、再びロンドンに集つて會議を開いた。この會議において、



東亞要地圖

第四十九 昭和の大御代

百七十一

支那事變
が起る

わが國は、國防上最も公正な意見を主張したのであるが、各國がこれに同意しなかつたので、やむなく會議を脱退した。

さきに、滿洲事變がひとまづをさまると、わが國は支那と停戰協定を結び、更に進んで日滿支三國が互に助けあつて、東洋永遠の平和をうち立てることにつとめた。しかし、支那の政府はわが誠意を解せず、いたづらに歐米諸國の援助を頼みとして、あくまでもわが國の排斥をはかり、その上、しきりに軍備を進めて、滿洲國の發展をもさまたげようとした。たまく、昭和十二年七月、支那兵は北京に近い蘆溝橋で、演習中のわが軍

第四十九 昭和の大御代

百七十

に發砲して戦をいどんだ。その上、わが居留民に亂暴なふるまひをするものさへあらはれたので、わが國は彼の誤つた考を正し、東洋永遠の平和をうち立てるために、正義の軍を進めることとなつた。以來、わが軍は陸に海に空にめざましい活動をつづけ、銃後の國民は真心こめてこれを後援し、舉國一致、この大使命の達成に邁進し、東亞永遠の平和の礎はしだいに築かれつつある。

天皇陛下の御仁慈

さきに、昭和十二年九月四日、臨時帝國議會の開院式に當り、かしくも天皇陛下は勅語を賜ひ、支那と協力して東亞の安定をはかり、共榮の實を擧げることにより、日夜軫念あらせられる旨を仰せられ、支那の反省をうながして、一日も早く、東洋平和の確立することを望ませられた。さうして、宮城内に大本營を置かせ給ひ、日夜軍務をお統べになつていらせられる。戦地の將兵の上には、常に大御心をかけさせられ、護國の英靈をまつる靖國神社には、しばしば行幸し給ひ、御拜あらせられるのである。

青少年學徒に勅語をたまはる

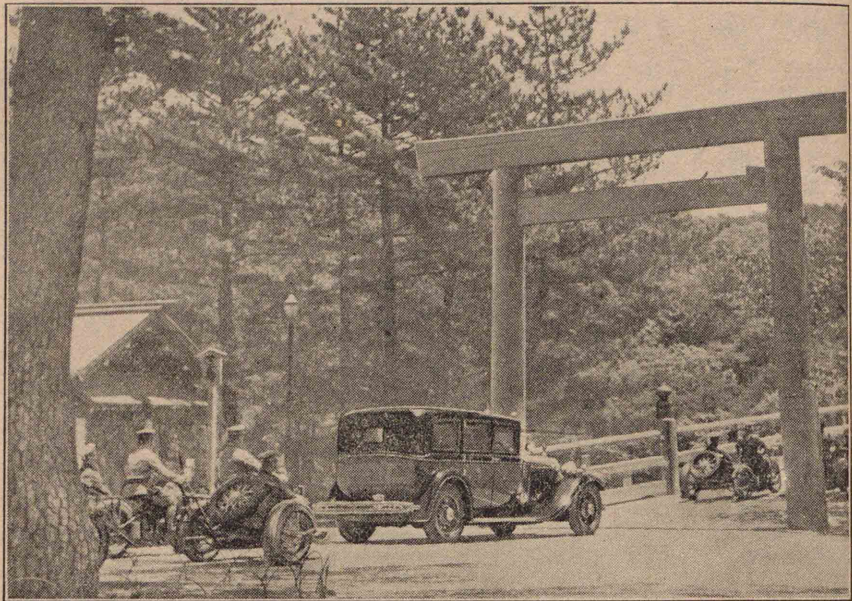
天皇陛下はまた、この非常の時局に當つて、國家の將來を擔ふべき青少年學徒の上に、大御心をそがせられ、昭和十四年五月二十二日、特に勅語をたまはつて、その向かふべき所をお示しになつた。

紀元二千六百年の詔を下し給ふ

昭和十五年二月十一日、紀元二千六百年の紀元節に當つて、天皇陛下は、國民すべてが神武天皇の御創業をしのび奉り、雄深なる御精神を奉體して、時艱を克服せよとのありがたい詔を下し給うた。ついで同年六月には、したしく神宮をはじめ、橿原神宮、伏見桃山陵、多摩陵などに御參拜あらせられ、紀元二千六百年の佳き年をお迎へあそばされたことを、御報告になつた。

日滿一體

同月、滿洲國皇帝は、はるく御來朝になつて、天皇陛下に紀元二千六百年のお祝ひを御申し述べになり、ついで皇大神宮、橿原神宮、伏見桃山陵などに御參拜になつて、歸國せられた。皇帝は、かねくわが皇室の御徳



天皇陛下が皇大神宮に御參拜あらせられたる

をおしたひになり、天皇陛下と同じ御精神の下に、滿洲國を治めたい旨を國民にお告げになつて、あなが、たまく皇大神宮に參拜して御歸國になると、天照大神をおまつりする建國神廟を、帝宮内に御創建になり、日夜大神の御心を奉體して、政治におはげみ

ドイツ
タリヤと
同盟する

になることとせられた。

これよりさき、昭和十四年九月、ヨーロッパの天地に再び戦亂が起り、世界の騒亂はいよゝゝ擴大してとゞまるところを知らない。天皇陛下は、世界平和の一日も早く回復することに深く軫念あらせられ、昭和十五年九月、かしこくも詔を下し給ひ、政府をして、わが國と志を同じくするドイツ、タリヤ兩國の政府と、條約を結ばしめられ、三國協力して、新たなる秩序を建設し、萬邦をして各々その所を得しめ、もつて世界永遠の平和をうち立てることを望ませられた。こゝに至つてわが國は、ひとり東洋の平和のみならず、世界の平和のため

めに、重大な使命を持つこととなつた。われら國民は、まずく國體の觀念を明らかにし、億兆一心、如何なる難關をも突破して、大御心を安んじ奉らなければならぬ。

第五十 國民の覺悟

御代々々
の天皇の
御盛徳

遠い歴史のあとをふり返つて見ると、皇祖天照大神は、神勅を下し給うて皇國無窮の基をお定めになり、神武天皇は、皇祖の大御心をお受けつぎになつて大業を弘め、はじめて即位の禮を擧げ給うた。以來、萬世一系の天皇は、神勅のまにゝ萬機をお統べになり、いつの

御代にも深いみめぐみを萬民の上にたれさせ給うたのである。元の來寇に際して、龜山上皇は、御身を以て國難に代らんと祈らせ給ひ、幕末の外患に當つて、孝明天皇は、ひたすら國難の克服を念じ給うた。六年の租税を免じて、民草を憐み給うた仁徳天皇の御こと、日常の御不自由をおしのぎになつて、たゞ萬民の上を思し召し給うた後奈良天皇の御こと、或は照るにつけ曇るにつけて、民草を御心にかけてさせ給うた明治天皇の御ことなど、いづれもたゞかしこいきはみといふべきである。

國民世々の忠誠

かくのごとき御盛徳の下に、わが國民は、天皇を現御

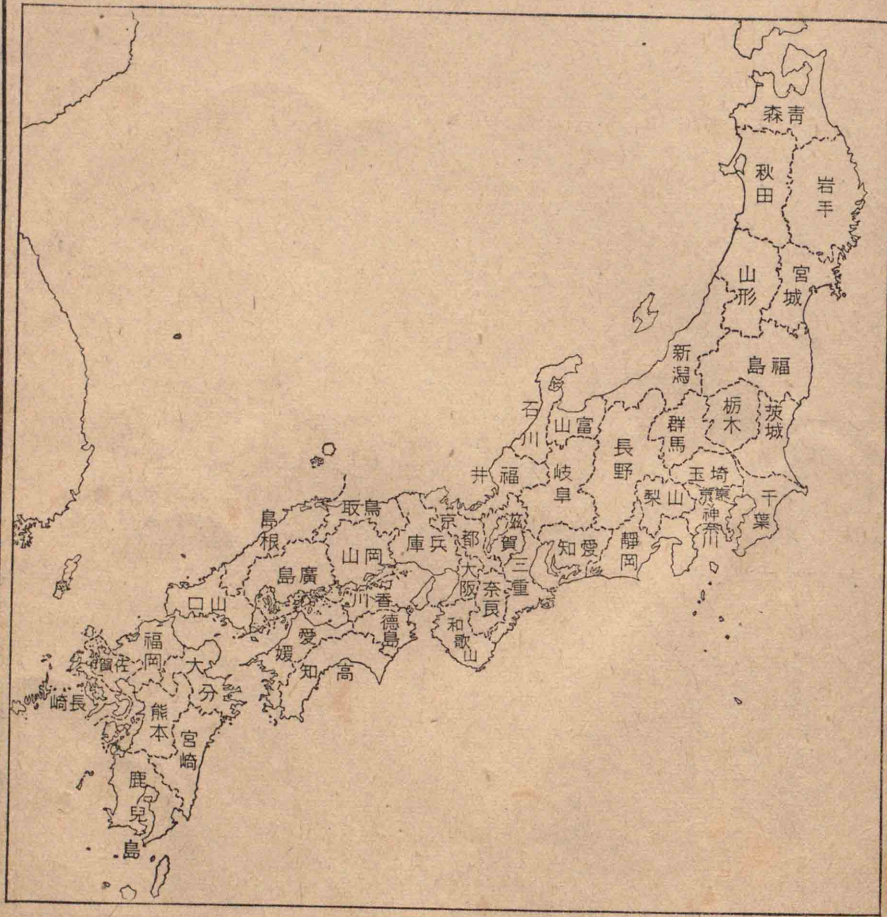
神とも國の御親ともあふいで、身命をささげ、世々忠誠をはげんで來た。藤原鎌足は、無道の蘇我氏をほろぼして改新の政をたすけ奉り、和氣清麻呂は、道鏡の非望をくじいて國體の尊嚴を護り、菅原道眞は、配所にあつても、ひたすら君恩に感謝して忠誠の眞心をあらはし、楠木新田・菊池等の諸氏は、一族をあげて忠節に死し、徳川光圀・本居宣長らは、大日本史や古事記傳をあらはして、わが國體を明らかにすることにつとめた。いつたん外國と事の起つた場合には、國民こぞつて奮ひたち、戦場の將士はもとより、銃後も一致團結して、よく外敵に當り、以て國威を海外にかゝやかして來た。

かやうにして、わが國はそのはじめから、國全體が一家のやうな姿で今日に至つたのであるが、その間、政治も文化も開け進んで、國運の隆昌はほとんときはまるどころを知らない。聖徳太子、天智天皇は、政治の革新をおとげになり、後醍醐天皇は、中興の大業をお建てになり、孝明天皇は、内外多事の際に國民を導いて、皇政維新の機運をお開きになつた。明治天皇は、これをお受けつぎになつて、維新の大業をなしとげ給ひ、政治、經濟、文化、國防その他、各般の改新、充實をはかり、國威を世界にかゞやかし給うた。大正天皇、今上天皇の御稜威の下に、國運はいよゝゝ進展し、今やわが國は、大東亞の新

たなる秩序の建設に邁進して、世界平和のために、重大な使命を擔ふやうになつたのである。
さればわれら國民は、世界に比なきわが國體の尊さをよく辨へ、忠誠なる祖先にもまさるりつばな日本臣民となり、それ〴〵自分の業にはげみ、億兆心を一にして、皇運の隆昌を扶翼し奉り、國史にいつそう光輝をそへなければならぬ。

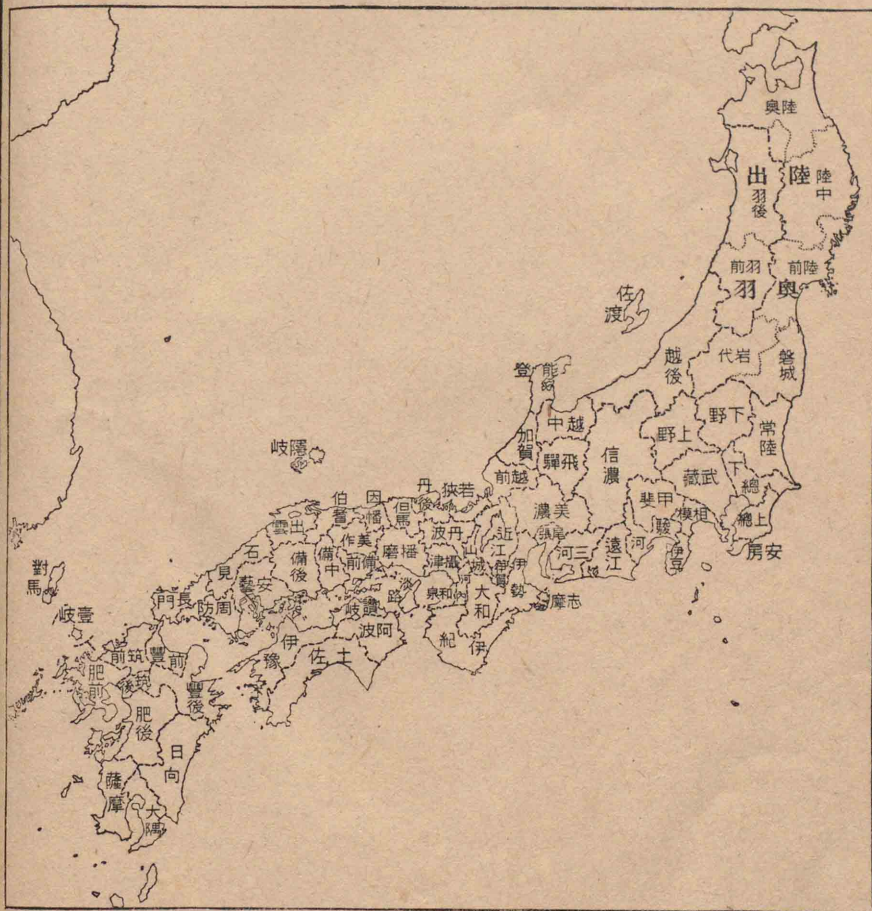
終

對照地圖



府縣名

國名府縣名



國名

年表

御代数	天皇	紀元	年	號	摘要
一	神武天皇	元	元年	年	即位の禮をお舉げになる
一四	仲哀天皇	八六〇	九年	年	神功皇后が新羅をお討ちになる
三六	孝徳天皇	一三〇五	大化元年	年	大化の改新がはじまる
四三	元明天皇	一三七〇	和銅三年	年	都を奈良におさだめになる
五〇	桓武天皇	一四五四	延暦十三年	年	平安京をおさだめになる
八二	後鳥羽天皇	一八五二	建久三年	年	源頼朝が征夷大將軍に任ぜられる
九一	後宇多天皇	一九四一	弘安四年	年	弘安の役
九六	後醍醐天皇	一九九三	元弘三年	年	北條氏がほろび政権が再び朝廷にかへる
九九	後龜山天皇	二〇五二	元中九年	年	京都に還幸になる
一〇三	後土御門天皇	二一二七	應仁元年	年	應仁の亂がはじまる
一〇五	後奈良天皇	二二〇三	天文十二年	年	ポルトガル人がはじめて来る
同	同	二二〇九	同十八年	年	天主教がはじめて傳はる
一〇六	正親町天皇	二二二〇	永祿三年	年	桶狭間の戰

同	同	二二二七	同十年	年	織田信長が勅をいたゞく
同	同	二二二八	同十一年	年	信長が京都に入る
同	同	二二三三	天正元年	年	足利氏の幕府がほろびる
同	同	二二三六	同四年	年	信長が安土城を築く
同	同	二二四二	同十年	年	本能寺の變
同	同	二二四三	同十一年	年	豊臣秀吉が光秀をほろぼす山崎の戰
同	同	二二四四	同十二年	年	賤嶽の戰。秀吉が大坂城を築く
同	同	二二四五	同十三年	年	秀吉が徳川家康と争ふ小牧・長久手の戰
同	同	二二四八	同十六年	年	秀吉に關白を仰せつけられる
一〇七	後陽成天皇	二二五〇	同十八年	年	秀吉が天皇を聚樂第に迎へ奉る
同	同	二二五二	同十八年	年	秀吉が北條氏をほろぼして全國を定める
同	同	二二五二	文祿元年	年	秀吉が兵を朝鮮に出す
同	同	二二五六	慶長元年	年	秀吉が明の使を大阪城に召寄せ
同	同	二二五七	同二年	年	再び秀吉が兵を朝鮮に出す
同	同	二二五八	同三年	年	秀吉がなくなる
同	同	二二六〇	同五年	年	關原の戰
同	同	二二六三	同八年	年	家康が征夷大將軍に任ぜられる
同	同	二二六九	同十四年	年	家康がオランダ人に通商を許す

一〇八	後水尾天皇	二二七三	慶長十八年	家康がイギリス人に通商を許す
同	同	二二七四	同十九年	家康秀忠父子が大坂城を圍む
同	同	二二七五	元和元年	豊臣氏がほろびる
一〇九	明正天皇	二二七六	同二年	家康がなくなる
同	同	二二九〇	寛永七年	徳川家光が西洋人の著書を輸入することをさしどめる
同	同	二二九六	同十三年	家光が國民の外國に行くことをさしどめる
同	同	二二九七	同十四年	九州の天主教徒が亂を起す(島原の亂)
同	同	二二九九	同十六年	家光がオランダ人以外の西洋人の來るのをさしどめる
一一〇	後光明天皇	二三一四	承應三年	天皇がおかれになる
一一一	後西天皇	二三一七	明暦三年	徳川光圀が大日本史の編纂をはじめ
一一三	東山天皇	二三五〇	元禄三年	徳川綱吉が孔子の廟を江戸の湯島に建てる
同	同	二三六二	同十五年	大石良雄らがその主の仇を討つ
一一四	中御門天皇	二三七〇	寶永七年	閑院宮家をお立てになる
同	同	二三七一	正徳元年	幕府が朝鮮の使のもてなし方を改める
同	同	二三七五	同五年	幕府が外國貿易を制限する
同	同	二三七七	享保二年	徳川吉宗が大岡忠相を江戸町奉行とする

一一九	光格天皇	二四四七	天明七年	吉宗が西洋人の著書を輸入する禁をゆるめる
同	同	二四四八	同八年	松平定信が幕府に用ひられる
同	同	二四五二	同寛政四年	定信が皇居御造營の命を受ける
同	同	同	同	林子平が罰せられる
同	同	二四五三	同五年	ロシアの使がはじめて來る
同	同	二四五八	同十年	定信が伊豆相模の海岸を見廻る
同	同	二四六六	同文化三年	本居宣長が古事記傳を作り上げる
同	同	二四六八	同五年	ロシア人が樺太や千島を荒す
一一〇	仁孝天皇	同	同	イギリス船が長崎を騒がす
同	同	二四八五	同八年	蒲生君平が山陵志をあらはす
一一二	孝明天皇	二四九九	同十年	幕府が外國船うち攘ひの令を下す
同	同	二五〇六	同弘化三年	渡邊華山高野長英が罰せられる
同	同	二五一三	同嘉永六年	御位をおつぎになる
同	同	二五一四	同安政元年	アメリカ合衆國の使節ペリーが來る
同	同	二五一八	同五年	幕府がアメリカ合衆國と和親條約を結ぶ
同	同	二五一九	同六年	幕府がアメリカ合衆國と通商條約を結ぶ
同	同	同	同	安政の大獄

一二三	明治天皇	二五四八	同二十一年四月	地方自治制(市制町村制)が布かれる
同	同	二五四九	同二十二年二月	十一日、帝國憲法を御發布になる
同	同	二五五〇	同二十三年十月	三十日、教育に關する勅語をお下しになる
同	同	同	同 年十一月	第一回の帝國議會をお開きになる
同	同	二五五四	同二十七年七月	イギリスとの改正條約が出来る
同	同	同	同 年同月	わが艦隊が清國の艦隊と豊島沖で戦ふ
同	同	同	同 年八月	清國との戦を宣せられる
同	同	二五五五	同二十八年二月	敵將丁汝昌が降参する
同	同	同	同 年四月	下關條約が出来る
同	同	同	同 年十月	臺灣がほゞ平ぐ
同	同	同	同 年十一月	遼東半島を還す(三國干涉)
同	同	二五五九	同三十二年七月	改正條約がはじめて行はれる
同	同	二五六〇	同三十三年八月	列國聯合軍が北京に攻入る
同	同	二五六一	同三十四年四月	二十九日、今上天皇が御降誕あらせられる
同	同	二五六二	同三十五年一月	イギリスと同盟を結ぶ
同	同	二五六四	同三十七年二月	ロシヤとの戦を宣せられる
同	同	二五六五	同三十八年一月	旅順の要塞をおとし入れる
同	同	同	同 年三月	十日、奉天を占領する

一二三	大正天皇	同	同 年五月	二十七八日、日本海の大戦
同	同	同	同 年九月	ポーツマス條約が出来る
同	同	同	同 年十一月	韓國と協約を結ぶ
同	同	二五七〇	同四十三年八月	日韓一體となる
同	同	二五七一	同四十四年四月	イギリスとの第二回の改正條約が出来る
同	同	二五七二	同四十五年七月	三十日、崩御あらせられる
同	同	同	大正元年七月	三十日、踐祚し給ふ
同	同	同	同 年九月	明治天皇御大葬の御儀をお舉げになる
同	同	二五七四	同 三年四月	昭憲皇太后が崩御あらせられる
同	同	同	同 年七月	歐洲の大戦が起る
同	同	同	同 年八月	ドイツとの戦を宣せられる
同	同	同	同 年十一月	青島の要塞をおとし入れる
同	同	二五七五	同 四年十一月	即位の禮をお舉げになる
同	同	二五七九	同 八年六月	平和條約が出来る
同	同	二五八一	同 十年三月	皇太子が歐洲各國へ行啓になる
同	同	同	同 年九月	皇太子が歐洲から還啓あらせられる
同	同	同	同 年十一月	ワシントン會議が開かれる
同	同	同	同 年同月	二十五日、皇太子が攝政に任ぜられ給ふ

二三	大正天皇	二五八二	大正十一年二月	ワシントン會議が終る
同	同	二五八六	同十五年十二月	二十五日崩御あらせられる
二四	今上天皇	同	昭和元年十二月	二十五日踐祚し給ふ
同	同	二五八七	同二年二月	大正天皇御大葬の御儀をお舉げになる
同	同	二五八八	同三年十一月	即位の禮をお舉げになる
同	同	二五九〇	同五年四月	ロンドン海軍條約が出来る
同	同	二五九二	同七年九月	滿洲國の獨立を承認する
同	同	二五九三	同八年三月	國際聯盟離脱を通告する
同	同	同	同年十二月	二十三日皇太子がお生まれになる
同	同	二五九四	同九年三月	滿洲國が帝國となる
同	同	同	同年十二月	ワシントン條約の廢棄を通告する
同	同	二五九五	同十年十二月	ロンドンで海軍軍備縮小の會議が開かれる
同	同	二五九六	同十一年一月	ロンドン會議を脱退する
同	同	二五九七	同十二年七月	支那事變が起る
同	同	二五九八	同十四年五月	青少年學徒に勅語を賜はる
同	同	同	同年九月	歐洲に戰亂が起る
同	同	二六〇〇	同十五年九月	ドイツイタリヤと同盟する

昭和十六年三月廿九日印刷
 昭和十六年三月卅一日發行
 昭和十六年四月一日翻刻發行
 昭和十六年四月廿二日翻刻發行

小學國史下卷尋常科用
 定價金拾九錢

著作權所有

著作兼發行者

文部省

昭和十六年四月二日
 文部省檢査濟

東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地
 翻刻發行 東京書籍株式會社
 兼印刷者 代表者 井上源之丞

東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地
 印刷所 東京書籍株式會社工場

發行所

東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地
 東京書籍株式會社

575,9
M